神穗義人錄補正

坤

210.54
H876a
K

重訂赤穗義人錄補正　卷下

鳩巢室直清著

尾張　國枝惟熙成卿補正

大石良雄　殉內藏助。和俗多無字。其有官者。以官名字。或假行第字。又有用下字無意謂者。雖君父前。亦以此稱。朋友相呼。亦如之。其子孫。或有下相因稱父祖殉者。唯繼嗣之人為然。餘子否。　秩千五百石。赤穗國老。父曰權內。母池田氏。備前州。岡山國老。池田出羽之女也。初良雄曾祖。及祖父。皆殉內藏助。世々為赤穗國老。祖父內藏助生權內。權內生良雄。權內早卒。良雄以嫡孫。承祖嗣為國老。因以祖父殉自稱云。

先哲叢談　大石良雄。取贅仁齋。一日来侍其講書。而時々睡。弗聽。衆皆匿笑。退後詬罵曰。惰懶如彼。不如不學。仁齋曰。小子勿妄謗。以予觀彼。非庸器。必能堪大事。山鹿素行。常辱赤穗侯長友。知己。竊謂侯曰。欲有致。而酬非常之遇。而私心所安。不為無所期。臣以經義與韜畧。教侯之諸臣。臣精力所盡。皆在於此。故能達臣旨。若處倫理之變。萬一

国立国会
26.9.10
図書館

245227

無服勤有所償乎哉。疾大喜。爾後至元禄之変。其遺臣果有襲殺吉良氏。殉成君志之事。

大石良雄。當素行被黜於赤穗時。親炙之學兵。後遊京師。從學伊藤仁齋云。方其窺隙之間。惰遊示羸。乃能使讐至忘戒心。而後一鼓得遂其志。一伸一屈。雖出於天授。素行遺澤之所存者。亦可謂不鮮矣。

○大石氏遺玩之古硯。今藏在勢州坂下驛高家某家。龜甲形。方六寸許。硯背有釋圓位自作五字。及非押。其記曰。

予曾參禪於盤珪和尚。師曰。本來不生。予不會焉。今春聊有識其趣。直到和尚或曰。良雄父曰內藏助。娶池田氏。生二子。長權內。次良雄。權內早卒無子。以故良雄嗣為國老。今按。此説非也。直清聞之池田氏通家。曰良雄者權內之子。其娶池田氏者權內也。小谷勉善所聞。安藝人之言亦然。今從之。良雄為人。簡靜有威望。甚為國人所倚重。死時年四十五。

補 報讐録

大石良雄。稱內藏介。其先出自鎮守府將軍。藤原秀鄉。世領近江栗太郡大石莊。因氏焉。

莊枕湖。高山四圍。人多驍勇。雖經世亂。不被侵掠。

中世隸足利氏。應仁之亂。闔族戰亡。特有小山久朝者。父大膳大夫。兄九郎。名關俱仕足利持氏。持氏叛。足利義教。敗而自殺。結城氏朝。奉其子春王。安王。據城復叛。大膳大夫。與九郎。從在城中。義教遣兵悉屠殺之。以故久朝自幼流落居京師。而大石師之傍。一之硯。師曰。旻則西行法師。自作之石也。予曰。不然。師曰。即今何人作。予曰。西行未生已前。某所作也。師微笑曰。出於爾者。須返爾焉。以贈予焉。予不辭拜受歸矣。

于時元禄六。春二月日。

大石氏某受用○□

右八良雄。關東二下向セント欲スルノ日。コレヲ雷道ニ附與ス。道ハ盤珪ノ法弟。時ニ山科ニ閑居ス。コレヲ愛スルコト日久シ。後台嶺ノ片安院。子岡ニ附ス。而メ岡コレヲ高家氏ニ讓ル。蓋シ岡ノ生園故ニ。時コレ享保十四年。巳酉三月ナリ。惟熙。曩獲ル圖記於友人某而藏焉。今質之高家某。以載於此云。

王。據城復叛。大膳大夫。與九郎。從在城中。義教遣兵悉屠殺之。以故久朝自幼流落居京師。而大石師之傍。一之硯。師曰。旻則西行法師。自作之石也。予曰。不然。師曰。即今何人作。予曰。西行未生已前。某所作也。師微笑曰。出於爾者。須返爾焉。以贈予焉。予不辭拜受歸矣。

于時元禄六。春二月日。

大石氏某受用○□

右八良雄。關東二下向セント欲スルノ日。コレヲ雷道ニ附與ス。道ハ盤珪ノ法弟。時ニ山科ニ閑居ス。コレヲ愛スルコト日久シ。後台嶺ノ片安院。子岡ニ附ス。而メ岡コレヲ高家氏ニ讓ル。蓋シ岡ノ生園故ニ。時コレ享保十四年。巳酉三月ナリ。惟熙。曩獲ル圖記於友人某而藏焉。今質之高家某。以載於此云。

乃與小山同出。莊民迎以爲嗣。久朝而上。系譜沒考。久朝三子。久重。泰賴。朝重。久重子曰金右衛門。名關仕足利義昭。織田信戎燬。莫所考。久朝三子。久重。泰賴。朝重。久重子曰金右衛門。仕豐臣秀次。重綱。重綱子曰金右衛門。仕豐臣秀次。之奪其地。朝重生重國。重國生朝良。朝良長。攻殺之奪其地。朝重生重國。重國生朝良。朝良生良信。初稱新七郎。後改久右衛門。仕豐臣秀次。秀次敗。屏居大石。生子良勝。始仕采女正。淺野長重。有戰功。及長重子長綱。改封播州赤穗。從徙焉。祿千五百石。生子良欽。亦稱內藏介。良欽生良昭。

報讐録　吉田兼亮。禄三百石。年六十三。
近藤源八。亦長矩之臣也。名知兵。兼亮嘗從學未就。長矩敗。源八不應義盟。逮衆解去。兼亮就之終業。曰。吾將有所用。豈顧其人何如哉。數月乃来京師。與良雄協謀。前後施設。皆出其策。

信行筆記　春風作松風。為是。○吉田忠左衛門。秩二百五十石。知郡事。此云代郡。兼亮。強力有材。最通軍國之務。又以言語。為國人所稱。赤穗既滅。良雄在京。遣兼亮。領義衆於東都一年。為衆經理衣糧。伺察仇家消息。甚盡心其稱權内。早世。良雄乃良昭之所生。承重良欽。以襲世職。為人和易簡樸。不喜矜飾。長矩之時。有故雖往國老。於事鮮預。而内實剛潔。存忠慨。最厚族人。至輸城日。人始知其有幹畧焉。既死。泉岳寺僧。命法名曰忠誠。年四十五。生三子二女。長乃良金。餘皆幼。

歸忠左衛門。秩二百五十石。知郡事。此云代郡。兼亮。強力有材。最通軍國之務。又以言語。為國人所稱。赤穗既滅。良雄在京。遣兼亮。領義衆於東都一年。為衆經理衣糧。伺察仇家消息。甚盡心其間。遂能一舉。而伸志於天下。賴兼亮之力為多。其来東都。列矦聞其名爭聘。兼亮以志在殉國。皆不就。衆入吉良氏第。兼亮元辰等。以年長將之。兼亮先衆。力闘殪二人。其臨終有和歌。曰。

君加音喜密爲。
音多思祖於毛比恩音
兔散音知羅須今音計朝乃音左朝峯乃峯音密念春音波留風。音加設
積音都毛比留白音志羅雪遠。雪音由喜散波
曾與利音加念天君禿音喜密毋禿爾音毋波
臨終。有和歌。曰。
波使知禿志羅設無人與利音比禿人急音以祖具死出乃出音
死時年六十二。
原元辰（モトトシ）　歸（トキ）總右衛門。秩三百石。步卒將。此云足輕頭。其
討朝乃音左朝峯乃峯音密念春音波留風。音加設
散音知羅須今音
音多思祖於毛比恩音
兔積音都毛比留白音志羅雪遠。雪音由喜散波
曾與利音加念天君禿音喜密毋禿爾音毋波
臨終。有和歌。曰。
波使知禿志羅設無人與利音比禿人急音以祖具死出乃出音
死時年六十二。
原元辰（モトトシ）　歸（トキ）總右衛門。秩三百石。步卒將。此云足輕頭。其
打老松の千代やめぐらん
松
雪さかぬ窓をあれとも是ゝの
山路は春の松そ色そふ
松
年ことし年とかさなりて咲物も
さそ花そ白ひの打添ふ春
物
かくれ行しら雲つゝむ山里も
かさほの物と春とまちけん
二月廿一日京都にて。他の家中を
ゝ。辞世ゝ。絶筆ゝ。
二月の末迄おもて迄候て
九重の霞をとけていつる日の
ゝゝゝゝ代は遠からし園
さよの中山
夜とともにてふ族の空なれや
志のゝ情をゝ小松の中の
さつゝ山こゆる無愛の
梁ゝ

天山音耶路音密知直清讀元辰此歌。知元辰之麻母猶存。及赤穗之難。曾勸其子以義而此時已亡。故元辰臨終之歌云爾。不然何捨父。而獨及母乎。死時年五十六。

間瀬正明（マセアキ）　雖久太夫。秩二百石。大監察。死時年六十三。

小野寺秀和（ヲデカズ）　雖十内。秩百五十石。京師知邸。此云京師屋敷留守居。秀和在京好學。禮見師儒。聞赤穗之變。棄家累赴之。京師人。聞赤穗衆報仇。皆曰。秀和必在其中。果然。其臨終有和歌。曰。今波音以麻早音波耶言乃音古禿葉音波種毛音具左無加利計利無音奈何乃何爾爲禿天音多免爲露音都結羅無由結音無須不死時年六十一。

事。皆如此。然不易於。我仲公後。可法於此。因述此事。以俟馬。

泣襟集　秀和の真筆を摸刻す。其中に秀ノすと書けり。

暗人傳　秀和の欵状を載せたり。復讐の事あづかり知らず。主人出立との欵を書しの翌日より早打にて江戸へ登せ。別をもせずに坂とたのまいくへやとはしれぬ。此ことのことなり。又その聞えなり。

古なかくても人のをやうん　ひとりをけふきのうへ春　都のそとやりくをざかいて。

ぬるほどの心わすれなる大ひの　ひもかくる夜のもゝ　日もくれぬうきなんた。

補　小野寺氏寄内手書。我名古屋某家有故藏眞蹟焉。自西京某氏所傳也。

惟懇嘗獲觀之。筆意之温淳。文辭之詳悉。足可以感想當時之情狀矣。乃證寫珎之。今附于此。

書中有難解之語。蓋其方言不可知也。故不改字體。而敢加臆度于左傍。以俟識者。

一ふのこ　をそ　ひとす　ふる井とひそうつ　をそく

別当の子供立ちやくそくの赤穂の事所々そこもとの中にそ。
ろくそ郎と申す絵人の数ふるをなん分れりてなまうとれそのあ郎のともれ面かげとろりんをそぐべてそうろう又その初欽の友たちのことへおくまでハ
思ひおこす吉羽の山の秋ごろのいろとゐ〳〵神そともよよ
復讐のとき名字名と金の短冊を書て。脊とはけるぜ人も日〳〵あつまりうて書はけ〳〵
ことをもやりてゐはんを筆とて仕〳〵一生〳〵のちが性をこれいえ狙十左ようう安保の妻とよ〳〵なり赤穂より妻一の文
日〳〵なのせりよ。両作家の姫

小刀なり〳〵今まで百年四恩ふ。おの〳〵を生ひ。刃わ〳〵う二一生をとく〳〵ふなとみて〳〵弘からまさ哀なるも。二月二日の父にまたつるも仏安くれのひ終へ〳〵我ばくそおさ〳〵ゐ〳〵。
迷ひなるともにゆく後のよはおろの雪もけるけうの月
死なるようれ花々も春れくんう〳〵もひめるぐよ。の秋ばころおりひづけ〳〵まう入ん。
語欽よいろ〳〵のまの時菜をおさんをうえて。
むさ〳〵のまうもうえつたのいもう候ものそうもうんん凡四十六士の詩欽連郷とて。此一挙を志るせるものよみ〳〵ゆ矢うう市井のう。好事の去の偽作とおほゆ。三宅氏もまついて。此先の歌右と巻う布いそ志錬の
います〳〵も日のもとに名あ〳〵すくるきかとの忠義
のるとほうびの世そ。死〳〵ての思ひおばうへ
をまし〳〵くん
一城中も校も。その秋こをとも。まできこみをも
ぬうぬうちよ此おら城ちうくとばすとう城こみり
ものう。此家のたまことにもちはきうる志うく。此
うんるさんくと修〳〵まて。おもき大志角度の此
こべまこくぶめうのなをとかく〳〵けうく大変
いう〳〵。初ちそうん。志色ごん。その和をきうく
うるひる入〳〵くはのてう〳〵。此料理小神をけ〳〵めて。

245227

写しをぞ。かつて世るの小說えハ
みくぬまのなり。於牧首にれとも
をもしる。その平日の欲もえへし
中に。町多ど。
三なふ示しとも又之に於の座よ
かうのしひるるタしくれるな
岸るるを。
女平風よ害首の雲を吹とらて
烟経き小册のすみかる
老牧の述情。
老ゐ羊ハよそになされていきと
法をごふも中人のゑき
などよろしとみゆ。げにまこれは
ど又まれたまはそ。心はるひのる
にも。意のまをせろうらハおおるゐと。
那備まそお母え述を。きる古學
先生の文集よ。此母氏年賀の
寄詩あるを見れハ。その下流を記。
汲むしろ。この先生他の慶吊に
つきて。他派なさ人よ論とおくる

人の身にいるるものゝかハけつこうに候得ども。おや
かくさはみさけそはせめてらくにいくらうると
らふもうのくすツきひとて。去ゝ原又今ゝ[illegible]
るはかくく良も。然中良をはさてあるせとるとへ
かしまう。そをよくはめてかしにおひてやしとそんしる。
一 我お候老おきにおふて志もるなまハるまてやふくわや
こくに。そのしにおんおんそてもあるましきう。さらけ
くまてのかくこのるおよ候きたのよるもあるかとく
どうりこうしたのふましきとん女もく覚て。めしに何る
あき首とあうて。於のかくこうらまもすゝ候も。貞之[illegible]

もしくハみそさしとハ。あうおもて。
古學先生詩集 賀小野寺十内母九十壽
母氏年高九十強。無憂無病又無傷。老萊孝思誰能識。膝下猶呼為小郎。
紹述先生詩集 同前
美君官政不違時。慈母九旬絲髪垂。況復一堂不違食。更無晨夕倚門思。
涙襟集 同姓十兵衛「贈ける書
一筆致啓上候。[illegible]
も不[illegible]。[illegible]
一 [illegible]家中[illegible]
[illegible]
一 上[illegible]

をよひもろへていらぬこうきをかてりおくさにて。久し
うしぬにいちこまを見とゝけまいらせ候へく。このに
ゆくうすこましそく。そのしくなうなき者とあり
るゆも文覚候のあらる心けまそ。こましも共ひゆくるうも
あくい。りう斗およひのうしてもうハもみきうそて。ども
うしもして一生をうちうろもおうるをあきこめのんを子
むさ夕へまし。
一 妻へつる姫経けるけになうてきやし。今ゝ原又も
おうしるふて。大ていのるうさきとへてもめんくの
かせきちきとへまし候。人のるハ云かよどぬる

ある田舎武士そのまた人さを
おもふ。仕官し決定すべしと云
事ゆゑ後を約不残会釈下
城いたし立退申ふ仕。依て家老多川九郎
月番次右門。右人を使者を
以て。四月廿日中ゟ申上。
右之通と申上。上使不残切殺
候付ては不叶なと歎申ニ
付。家中士共へ納め仕舞を
申立候ゟ。又候て申上。
重ね之通と申上候付。
候共不残切殺候付。
とお出ゟ。右人々月廿
五日ニ出立。
一門中ゟ両右之通
候共不残切殺候付。
戸田采女忠次。戸原金兵衛。
八田左大夫。戸田権右衛門。村上喜

里之孫左衛門
松平安芸守殿ゟ使者ニ
井上左右衛門。丹羽源左衛門
付申候ゟ。
一拙者儀ニ付。
内藤助宅へ参候ゟ。
内藤助儀家中一等ニ
進退ニ仕候ゟ。
若ゟ
かくてきの屋敷のつゞきにて
よりとられて
座敷のうち
我おゝ
のかニ人
のようひ
かくり。
なるゝゟ。
おゝて
ある

なく。毎日終日城に在て萬事を
引請ぬるもたしかなる不中常席
拙者也。然も不忍彼に附之者
来。めいよの状進らせそれ上そ
今夜存せとかからか家来上下共
心たとひ人ゝおる寸志立
此中り公儀と思んして待き
其も。能様の挨拶して止る
るなり。何哉ふ不具是一服除
一本白帷子きて外そて尚更
着替させり挨拶に入させたり。老
母妻子にも此心さしはゝ中せん。
拙子あさくとりなすにふ較此元
たし迎添ね果なく。母妻とも
若志わ能ん。まつ在座中に上六
日限下中上候も云しん。出目能
小家し老也。是又詳識して定
と用ろとこ為の事ふ可之。服
坂飯下素派もなくん。唯城中
まて各自滅し光陰てん。まあ

ちく〳〵ときりたゝひてとおりかしよしやそこまた
かまへてかくきの方にちゝ出てゐるりのおぶきと
きこえゆく。さくめて内そとのにちはてふせさ
てやしまつそのん次すみど。おのく内にいひあはせ
くるゆへは。かくきいらくらが。なきおてうしろが
ら。いるへきとん次てつるを切たちてさおりたる
しんとよくんのつきくりとて。かきるあらくその
こきりみくかみもし。これがよのまをあはせす。
おせんのされもさそのりも共にうろこひたれ。
今かち十めんをよくつるよゆく。そごろおを

人きらいく四五度なかりし我
矣此書中し趣と結得よ
讀く以けせてぞり。女までも
きのここさらくる発覚ゑ
なる。ら給ひてなり。後に服
も不従に存じ申す者なん。なや
こそえ毎しも絶しくて
夜中従ひ立草し申云。
只申し
初冊七日　小野寺十内
小野寺十内妻
拙く　てある事に至る。一家
こぞを不もやうの事に有
らんか也なる。可為心易候。

めちて。ひろそこて勝負して名誉をあひしらく
とて。座の内つきりの人数そてかまく。引つとて小
つのあるをまのしせおきて。おんのこくここお
今ふ物をつきふせやしよし。源五八大たちとてあぎ
みたの女城たちをめちて。下にられる丹のあめんの
小袖きて上にあめんのくろきひろそての小袖をき
もし。お立つきそていさきよくらん〳〵やし。ごまも　とうの
てきをうちとりもし。さろきあともぶんくのそら
きしておおしくなきとてげかりす。さそく
うれしきすのしまつくとも。ようこひのよへし。

ねむりさめてそのあくるあさ手水うがひなどをすませ
さうづして老人がたにまゐりをよくすませ一かき
のあの内へ入人数一人もいきておへねてこゝろ
おちついてこゝろさしづなどおこなひまへたがひに神文をかきしやと
うちゆへ西のかいへ大石ちからをともひかいそへは
たらひ我おもひもしやけやを松て三村次郎
三ツ口の戸ひらをたゝきておやぶりごとこゝ。
すこし上野介いんきよのけんくわん也入もし。その
いきやひいうるのてんまたぜめんもありてをむう

へうちやくと思ふまて。外一入てつの方のかこのもやあ
そこへ人おあひてるおとこせへくもをまふ二ありて
てはきふせやし。まへくいつをまもり。我おハかのうへ。
うへ四ツ隣去屋ちうへ及松ごにやうきの
肉をまもりて張うし。こゝのさうこ会をはうひ。
その方をまもりおあへくの。二ハ三人はさうせし。
一人を庄屋添あらはてゐそ。十内なあそりへうを
ほめし。一人を大石瀧右衛門そのおとこの
たをれうと念仏やしるまてやすし。三人あうせう
このあるへて。老人のほうをはそりとややへさ屋り身

のるをまいかゝりもかけつけし。

一 新七左衛門とて廿そこそこなる若ものの

かくきまりて死ぬるとて先祖の名を天下へあらはし

ぬる又本多の一そく。おやの広いえのまへにけ生害を

そるべくてもし。

一 そのうへ。ふかくのうち。百四五十人ばかり大ぜ方の

つてそこらのやしきをもとめ。ふくのこころがゝり

すべてよきかくごとにやさるべし。

一 其ほかくさ〳〵のうち。ふかくのまゝたおつるをつけ

の金酒もねぎ酒もとゝのへて。十七人のそうし。歌をこゝ

かゝるかゝりもつけ。

そうてさしひ〳〵くもるべくそよみ十日ごろ

やしきのかくごをしてきうすをそべく。神おろうん

一人べつ〳〵にすてやしきをおもくくあとそ

一番又おくりてあるもいひやくく。まつるもんやを

くらひなべ〳〵。ろけおそあとをめられきう

まのうへをもこゝろにゆく後の世心の座こも雪の松の月

死のくるをパ古墨もとゝんくこも思ひもめる

へきけ。ふけ此男ひつけ〳〵入。せんぶたいろくの

まゝの中をおさんするをこゝて。

むさし野の露ときえても名はつきせじといひしもかなしき言葉なりとゆかん

一　城中にて終には大家にては人あまた八分人もありと

きこへて。其文あるきくにつけて。くやしさこそおもひやらるれ

れて。それよりしも分よむとてきこしめして。分と

うけたまはられしも人もありて。分の道の者までの

うれへにおもひて。おもかげおもひしのびしも見え。

一　同名十之丞。大石どのの家内。浪人おほく助けを

はじめてさとさせるべく。浅田源之丞方は正月

よりつめてのわかれときゝをきこしめし。のちに

わかれしもあはれがりてすゝめもあきれまするよしにて

こころへてもし。

一　とうしのさいしの事。いますてはいかにせんきもなく

ては老中秋元但馬守殿の御内に。奥田孫太夫殿と

かやしに但馬守殿御手わたされてのちに孫太夫さいしを

あつかりとのかたへ引とりし又田村右京殿とののゆかり

女房のおやもとに。これはたのまれし引取申し。吉田忠左衛門

さいしも。ちかき事なりむこの十郎左衛門と倅をも

よし。ほかにも親類のいきおひにてそれぞれにお大名

かたのほどころにかけられしなかにはかくれなくけるなり

ぞ。それぞれひきとるべき方よりもあるし。あまた

報讐録 光延作克延。馬廻作吟味方。

△忠度旅宿之歌 平家物語

ゆきくれて木のしたかげを宿とせバはなやこよひのあるじならまし

とやかくし。来るうわんとの一はん何能杉也。いかやと
うきてもつくすまじけきことれまでにて。親子
ともに腹切るといふた太郎と喜ぶ方つてし。何
るもんなのつまるきをさとりる事がの外ハある
まじくとし。
二月うて 十日
かたんとの る
おかず幸渡よる大るうしくやめてまらいをせて きる
てるまし。 そ

間光延 號喜兵衛。秩百五十石。親從隊騎。此云馬廻。其

重勝聞書 武けれども千人ハ。あと残し也。同志の者ハ律義にて堅き男にてを千人成。拙者も千人されハ。上野介殿を十次郎殿被相殊に志もとに揚ぐ候ゆへ者共思る候負心也しく千人ハ何事もかれこ千人。妻子共の事も見よ。ハ結ねなと存たる親共まて笑ことぬくまれ。拙者も存めひ。妻と計そね入る時をとらへ給ひ。最後の義。拙者側に書り何ぞる存在いまもめて此とかなハ。ハ康平まる辭世の歌を書たるとぞ。とさ祝むすかり庭の葉さめて事せて帰る春の暦。歸給陣を兼るやハ。被貝十郎左衛門兵衛立延と言。於監預を隠りは迫而て母孫左衛門成。胴乞を仕へとて肉を我物我何れも中し候とも。各参ふすれたしなと存とも云ゝ。十方ある千人ハ先ハ我衣我の目ニ立

入吉良氏第。箋頭和歌。繫之槍不。其歌曰。都音密耶古
烏音禿利來音左以言音禿古問音禿波無武二乃毛乃乃婦有
恥二音波知阿留世世音禿波與知耶音志知留不知耶羅須二音志友人青
地伯孜曰。此事風流。可以娩美平忠度旅宿之歌。而義氣慷慨則過之矣。其巧拙。固不足論也。死
時年六十九。
礒貝正久。號十郎左衛門。秩百五十石。比弓銃屯
將。此云物頭並。初赤穗侯之訃至國。衆方議保守城不
下。正久與片岡高房相謂曰。我二人者。受先君恩
特厚。不殺吉良義央。雖死將不瞑於地下。謂城中
士。公等死於城。我死於仇。行止皆殉國也。公等勉

老母居此。母者。對一失孔之義。又當時之語也。母猶俗云母親也。
壯斗。壯士之壯。下放此。
為人後悔之。
○助左門事。仙石氏。仙石伯耆守秀久。住此時。攝州有馬郡。
せんや。誰とやらん。我員不知。
ひらくそといひ。其人の為人を感心して。
淀殿の御母。
絲を染入れたる矢羽をかけ。
赤穂實録　絲を染し十三日の夜參
雪けれて心ならず行〳〵と
との〳〵我句をひねられ〳〵

重勝聞書　助左門屋敷を修
先年水出の時屋敷を囘

之乃去。赴二東都一。及二明年夏一。從二吉田兼亮一。請二良雄一。奉
盟約。卒以報仇死。果如其言。直清謂。礒貝片岡二
守以死。故獨以復仇自任。可謂壯矣。其後良雄之
策。亦出於復仇。是二人啓之也。然始終與二良雄等一
合謀。不敢急於踐言。先衆輕發。志在必成。致二
其謀一而已。若二二子者一。可謂善用其勇矣。死時年
二十五。

堀部金九　歸二彌兵衛一。秩三百石。以二東都知邸一致仕。
死時年七十六。

近松行重　歸二勘六一。秩二百石一。親從隊騎。死時年二
十四。

冨森正因　歸二助右衛門一。秩三百石一。行人此云二使番一正因

此夜乃傳夜と云赤穂早使抔
書は六日條下に留置ぬ者
二月四日條下に留置ぬ者
母義也。此條下へ留置ぬ心
抔と云は神崎を或る渡の
場に書付吳ゝ
香帆猶贊　單衣物の表裏
四日は姉の忌日なれば
先ゝ〳〵まで切りくの目と
抔の孫抔の母のひ出ゝて

報讐録　正因舉事之日訣
母。母贈二所著白襯衣一曰。汝
著之以死矣。母悽我為一

為二人豪健一。有二材力一。事母孝。與レ友信。又善二俳歌一好賦。
其攻二吉良氏一也。見二間光延槍干有一レ箋曰。豈輸二君乎。
亦題二俳歌一首著レ槍。其歌曰。飛音禿入天比音古無手
尼毛二音多
手音天不レ停二音阿麻羅奴一霰音加羅禮一哉音加奈一良雄使二正因
與二兼亮一報二事仙石氏一。亦不レ辱レ命而還。事見レ前。其就レ囚
細川氏使者令レ更レ衣。衷女袒衣。傍人皆有二怪色一。正
因曰。此母所レ賜也。願無レ易レ之。聞者哀レ之。其在レ囚中。
逢二元旦一。有レ歌曰。今日毛二音春音波留不音計音盖加志音波盖都
不レ容二羅奴一音加寢音卧志音不念音哉音加奈或曰。正因嘗
有レ事。告二急赤穂一。選二用正因一。赤穂去二東都一九百里。正
因不レ脫二佩刀一乘レ轎日夜更レ夫以馳。三日三夜至二赤

重勝聞書 潮田又之丞筆記。
又ハ七ノ字ト書ケリ云々。
武士の道とはかりと一筋に
おもひ込たる死ぬの狂ひよ
早水藤左衛門ハヤミツタカ。稱呼ヲ書誤
レリ。
北水先風雪の中より折ふしの
たよりてゆるまもの樓よ

潮田高教（タカノリ）　騅二又丞一。秩二百石一。掌封境圖籍。此云二國繪圖一役一。
　死時年三十五。
早水滿堯（ハヤミミツタカ）　騅二藤左衛門一。秩二百石一。親從隊騎。死時
　年四十。
赤埴重賢（アカハニシゲカタ）　騅二源藏一。秩二百石一。親從隊騎。死時年三
　十五。
奥田重盛　騅二孫大夫一。秩二百石一。掌二軍器一。此云二武具役一。死
　時年五十七。
矢田助武　騅二五郎右衛門一。秩二百石一。親從隊騎。死

重勝聞書 庄屋源六ノ内ニ番
中ノ兵衛朱柄ノ槍ヲ持テ出ル。泉岳寺ノ表門ニ
組備ヲ立中老ト名乘ル者ヲ待ル由ヲ云ケレバ
其ノ名ヲ聞ニ教平ト答ル故其旨ヲ云入ル。
岳ヨリ源六ヲ呼出ス。暫ク有テ兵衛
モ源六ノ後ヨリ出ル。切腹ノ座ニ着
ヤ否ヤノ事
惟淑。頃得觀熊井氏所藏。
高房真蹟。嘗寄其本父。問
安之手簡也。字體寬裕。而
有筆法。知為一家善書矣。
赤穗華岳寺。出高房親書
之模本。或示之余是内匠
頭擊義央之日。高房在東

時年二十九　騅二瀨左衛門一。秩二百石一。親從隊騎。死時
大石信清
　年二十七。
片岡高房　騅二源五右衛門一。秩三百石一。近侍主務。此云二
　近習用人一。高房臨レ死語二傍人一曰。某寡君僕也。馬前執レ兵
　以從。寡君擢自二行間一。厠二之士品一。賜二祿命一職。與二群臣一
　齒。今並坐自殺者。多爲二赤穗世臣子弟一。而孰謂馬
前之僕。乃與二此等人一同辱二朝命一以死。不二亦榮一乎。顧
無二以報一寡君知遇之恩一耳。乃流涕不レ已。聞者爲レ之
泣下。死時年三十七。

都。即時使早水萱野二氏。告變於赤穗之手簡也。其記事詳悉。下筆沈著。毫不著驚愕粗卒之迹。視之熊井氏所藏者。筆力齊一也。嗚呼。大丈夫。當如是乎。宜矣。能不誤密謀。而遂以濟其報讐之大義矣。可不謂雄偉哉。華岳寺所藏者。今附記于此。

以上書ヲ以申上ル趣
御勅使柳原大納言様。高野中納言様。御院使清閑寺中納言様。御道中御機嫌克。当月十一日御着ニ而。十二日御登城ニ而[illegible]。十三日[illegible]。翌十四日於御白書院。御勅答[illegible]。浅野内匠頭[illegible]於松之廊下ニ吉良上野介殿ヲ[illegible]

〔補〕高房尾張藩臣。熊井氏次子。爲片岡氏所養爲嗣。高房義父。號六左衛門。高房初食秩百石。後食三百五十石。爲側用人。高房祖熊井藤兵衛者。嘗仕淺野釆女正。爲武具奉行。食秩二百石。曩時安藝侯女。適我敬公之日。其子十次郎重房從而來焉。因爲我藩臣。其長子次房。又號藤兵衛。次子即高房也。於六左衛門爲再從弟。赤穗及國難。高房奔走東西。不暇省本父。其將往復仇於吉良氏也。來省焉。陽謂曰。兒所以久違慈顏者。去國之後。貧窶切迫。垢衣弊裳。懼煩大人也。今也幸而爲某侯所聘。將以之東都。以故拜趨焉。父重房聞之怒曰。士之屢貧。何羞之有。汝主辱國除。而不能以身報。而仕二君貪利祿。士之所恥莫大焉。我

[illegible]
早水藤左衛門[illegible]
[illegible]
[illegible]

三月十四日巳下刻　片岡源五右衛門
高房 花押

大石内藏之介様

豈面汝。汝可速去也。高房恐懼。不知所爲。無辭而去焉。次房哀憐其情狀。竊送之。行里餘將別。高房謂次房曰。其觸大人之譴怒。無所逭罪也。願將以他日謝。然今遠爲別。人命朝不待夕。某若有奄忽下世。阿兄幸宜代某謝。泫然泣下。乃留所佩小柄刀而去焉。次房還家。重房激怒曰。父所逐者。兄送之。是何意也。汝亦不許面。次房驚愕而謝曰。兒失大人歡。罪無可謝矣。雖然高房之東行。有可異者也。伏願大人少寬意。以竢他日之信。幸甚。居亡幾。復讐之報果至云。惟澂聞之故友阿部松園。松園國校督學。其爲學生時。熊井之

△成童。已見下于良金答水野小左衛門注上。

後嗣。蟠龍者。在二教授一。益是談出二於其講學之餘一也。高房所二遺贈一小柄刀。傳藏二於其家一。松園嘗觀之云。高房有二女二人一。熊井氏養之。皆嫁二某々一。今猶為二姻戚一。惟憑按。據是則本文所載。高房臨二死之語一。極知為二謬傳一所載。益有二傳疑一者。又逸傳者不少。恨今不能得而詳也。

以上十七人。賜二死越中守一。肥後侯邸。

大石良金　靭主税。良雄子。母石束氏。但馬豊岡人。京極氏老臣。

石束源五兵衛女。自幼岐嶷如成人。年十四。有二赤穗之難一。與二弟從一父至京一。明年良雄遣二妻及幼兒於豊岡一。託二外舅石束氏一。召二良金於前一。諭曰。人生十五曰二成童一。始學。今汝年及此。吾願汝留意於汝父之言一。人道莫大於義。義莫重於君臣。汝父受二國恩一至厚。義當為先君死。汝雖未仕於國。親受中君祿上。然其生長於家。有衣食之裕。有僕隷之從。自享奉養之安。優遊歲月之間。汝之私國恩也。亦已大矣。汝獨不念以此時捐生而有以報先君於地下一。吾勸汝死。父子之情。非不自傷。顧人誰不死。苟以不義生。遺臭千載。孰若以義死。流芳百世。此吾所以愛汝之深一也。汝若不聽吾言。當從汝母歸豊岡。徒以相從於此無為也。良金曰。大人何出此言。雖某亦知大義之分。寧忍忘主棄親。自為禽獣之行而莫之恥乎。

赤徳實録　主従事。従之而死。初之逐一討。傍若无人。毒発而死。其主従之義。感動人心。如此。

先哲叢談 細井廣澤。以學擊劒於堀內源太左衛門。與堀部武庸情交尤密。當其襲吉良氏先夜。良雄等皆會源太左衛門家。廣澤避奴僕獨赴離筵。齎以雞卵。武庸傳杯碎破其雞卵曰。明夜碎破敵讐亦若此。而出。其勇敢如此。後木村貞行在松山庵邸。以此事語庵家之人曰。其等自始謀此事來。自分死已久。方臨事之間。明無愛身顧慮之心。然今而思之。何所遲疑。而不敢入寶。乃爲良金所先。以此知人不獨有勇怯。勇亦有優劣不相及也。死時年十六。

堀部武庸（タケツネ） 稱安兵衛。金丸養子。不知始何姓。秩二百石。親從隊騎。初武庸仕溝口信州家。有故辭去。方流寓東都。依一朝臣家。會武庸諸父某。與某人有怨。鬪於高田馬場之下。（高田馬場。巷名。）武庸以身赴之。卒擊殺某人。扶諸父以去。都人聞而壯之。其後仕

願與大人共死。使天下後世有以稱父子殉國之義。良雄聞其言。哀其幼而志壯也。泣下。曰。汝能如此。誠吾子矣。是歲九月。良雄使良金從小野寺秀和。大石信清等東行。至武州河崎驛。去額上髮。乃頓然一丈夫。和俗近世皆剃去頂髮。獨留兩鬢。至頂後會爲髻。平居露頂無冠巾。幼年人。少剃頂如月弦。別束額上髮。跨月弦上。屬之後謂之元服。蓋假古冠禮之名。其實無加冠之事也。十二月。從良雄攻吉良氏。力鬪過人。衆不知義央所在。見室中有寶。窺其中闇然。衆相視不敢入。良金從後來曰。我身小宜於入。寶。直跳入其中。衆亦從之入。行地道數步

廣澤壯其言。口吟一絶曰。結髮為奇士。千金那足言。離別情無盡。膽心一劍存。武庸泣下。廣澤亦拭泣而別。中晷果至其明夜云々。及東方既白。有叩門戸者。廣澤遽起迎之。武庸全身淶血。高呼曰。宿志既遂了。今將之菩提院。辱平生之交誼。誠生別限於此。又不啻一言。疾走而去。廣澤佩刀。不遑著袴。跣追至永代橋。四十六士。過橋半。而僧與武庸。及所面識二士五人。永訣而帰。

赤穂。金九愛其勇健。養以為子。死時年三十四。

補 報讐録 堀部武庸。本姓中山氏。稱安兵衛。金九之養子。襲父禄二百石。年三十四。本父仕信濃守溝口某。有故屏居以死。武庸去依人于江府。母舅菅野六郎左衛門。仕于左京大夫松平頼純。與友有争。期鬪于高田馬場。行過武庸。告以事故曰。此非可以告子。或曰。六郎左衛門先往。其妻馳人告武庸。第遺累在。願頌付託。武庸曰。付託事在後日。安面覩伯父期決。可束手而已哉。固請偕往。或曰。武庸請偕往。六郎左衛門不肯而行。武庸乃遣書訣所依。為馳赴場。六郎左衛門從一奴。仇從徒二人。武庸進。方與二人鬪斬之。一人從後來擊。幾中。乃旋身横斬之。一人望勢逃走。而六郎左衛門及奴。亦合擊斬仇。時六郎左衛門被重傷不能起。武庸乃壁剸仇屍。使其死。穏扶六郎左衛門行里許。投一人家。浹時六郎左衛門終死。武庸出市。買棺斂之。使奴負送僧寺。還更至馬場鬪庭。則路人停觀如堵。乃混衆中視仇家來斂屍首。徐而歸家。初鬪仇及帶。斬寸許隨不補綴。人問之。輒曰。所以得有今日者。頼此帶爾。我将留以記其功。後兎金九。求仕長矩。金九愛其勇薦之。久不見擧。謂武庸曰。幸惟憑按。幸上。恐脱不字。

我無子。子必求仕。何不來爲嗣。武庸曰。此是下情所願。請退謀所親。金九驀然曰。子無今決。莫復以言。武庸謝曰。唯命。然冒姓以養祿。非我之志。而公之子我。亦將有取。繼續非其所料也。請從本姓見稱。金九可之。即席結成父子。居歲餘。武庸乃曰。於我足矣。姑冒堀部。或云。金九聞人語武庸助舅殺仇。輒泣。其友諫見之。數日又往。語曰。聞子孤寓未就仕。我有族人喪嗣者。願得子以託姓。可被許否。武庸不可。數日又往曰。前者難於斥言。託名相報。其實求嗣者我爾。我故無子。前聞子勇於衆中。言曰。必得斯人以爲吾嗣。衆笑曰。以彼之材。安肯來續子家哉。吾答。彼以武節自任。必可致也。子今固拒不聽。忍陝我無上辭於衆。邪武庸聞之慨然結成父子。衆之濟事武庸與奧田重盛。

報讐錄正種。嘗有故罷去。至此死節。力鬪多殺爲最。

惟凞云。我舊藩。有稱不破數右衛門者。正種之齋也。其家藏正種寄佐倉某書。及忠雄寄母書。皆真蹟也。其傳曰。正種與忠雄素相善。復讐之後。其子某者。容

功謀最多。			
中村正辰（ナカムラマサトキ）　騅勘助。秩百石。典書記。此云右筆。死時年四十五。			
菅谷政利（スガヤマサトシ）　騅半丞。秩百五十石。親從隊騎。死時年四十四			
不破正種（フワタネ）　騅數右衛門。本姓岡野氏。父曰治大夫。爲不破某所養。冒姓不破氏。秩二百石。親從隊騎。	正種嘗得罪於君。去赤穗。寓居東都下。數年。常自眷戀舊主不已。聞赤穗庾之死。大恨曰。自今以往。吾復何恃。居常忽忽不樂。至明年秋。正種自東都		

居山城伏見鄉。忠雄母亦在其鄉。二家來往感泣于往事。既有年。忠雄母及裘殘附與其書。故有此藏云。余嘗觀之。其忠勇壯烈。見于毫端者。足令人感想。因謹寫玆之。今附之此。蓋其大意與秀和等書相同。故畧取其要而已

上畧

社後裘良雄。豫州人。仕留守內匠公。入江戶。內匠公被讒。切腹。良雄與諸士謀報仇。詐與家老大石良雄等不和。離散其黨。使人入江戶。探其動靜。良雄獨與其子主稅及一人從。潛匿山科。二十五葉。不與家老等會。良雄知其計。先遣人江戶。令探其動靜。良雄獨與其子主稅及一人從。潛匿山科。二十五葉。不與家老等會。良雄知其計。先遣人江戶。令探其動靜。

至京。見良雄曰。某無狀。得罪內匠公。然尚望他日得以贖罪自効。不謂內匠公一朝爲義夫所搆害以沒。每一念至此。未嘗不痛恨大息。忽然忘生。如聞諸君欲爲先君報仇。某雖不肖。獨忍偸生苟免。願使其補行伍之闕。而從諸君之後。庶得以死報生而謝過於地下。是諸君之惠也。良雄曰。子之志有可哀者。然子爲先君所絕。而先君亡矣。吾無所承命。而縱子復群臣之位。則是死君也。吾不敢。正種泣請不已。良雄歎曰。子誠忠臣哉。吾東行在近。當以他日與子俱至泉岳寺爲子請命先君之靈。

彼方報仇在城內。公仗後。仍對。事仕之者。先君之。令。泡。

然後可。正種遂以是年九月。歸東都。無何良雄至。與之約日詣泉岳寺。正種朝服趨寺。良雄亦朝服以至。戒正種無進。獨詣墓前。如當時啓事狀。乃言曰。舊臣正種。自得罪以來。日夜戰懼。從臣求哀。臣察其情。言出至誠。不敢不白。言訖卻立久之。呼正種曰。來。君赦汝宿過。復汝祿位。正種涕泣拜謝。乃退。遂與衆赴吉良氏。今按。神崎則休筆記。先是。岡野治大夫。大岡清九郎。井關德兵衛。有故去國有年。聞赤穗之難。衆議保守國城。三人者。介曾自詣大石良雄。請與衆共死。良雄感其志不許其請。直清疑。此三人者。首得罪赤穗正種。間光風。亦連坐其事。同去國者也。然良雄許不破間二子歸義。而不許三人共死者。方守死城中之時。三人者。自外來而歸之。嫌於招聚

惟淑按。赤城盟傳貞行所跋。與曾内詩文不異。今取其原文。以附于左。

淺野長矩為獨夫吉良上野介所困。初於殿中有事之日。不遂志。而獨夫全首。故臣等遺恨暫不止。後是同志之義士。相謀相議。欲刺獨夫。然時未到。而覃今月今日。嗚呼。予愚祖父。木村吉兵衛。奉仕淺野霜臺長矩。受恩采女正。長重之恩。故愚父木村總兵衛。昵近故内匠頭長直。而請慈愛愚不肖。雖不敢受長矩之寵。依父祖功勞。奉祿無違。養妻子。言奴僕。恩澤莫外望。而送年月。今也踵白刃。決必死。欲無辱君臣之義。何幸如之哉。冀得吉良上野頭獻長矩之影前者也。尚綴野詩一絶。以述其志。

身寄寒雲東海東。命窓恩義世塵中。看花飲酒濟幾歲。時矣曉天霜雪風。

時紀元祿十五。壬午歲。十二月十四日。木村貞行。四十一。

亡命。包藏禍心。故却之。若不破。間二子。請共死於去國之後。則許之。固無不可也。然觀三人者能請於前。不能請於後。其歸義之心。亦有不可信者耶。是未可知也。死時三十四。

千馬光忠　　騎三郎兵衛。秩百五十石。親從隊騎。死時年五十一。

木村貞行　　騎囧右衛門。秩二百石。親從隊騎。其攻吉良氏。曾内面縫著詩。而序之曰。君子疾惡之心。小人驕横之行。二者卒然相激於談笑之間。必有相害而不相容者。宜乎。先君之逢鄙夫。而隕其身也。悲夫。惜有事殿中之日。不得自快於一擊之間。而身獨嬰法網以亡。使鄙夫全首領於朝。以貽臣等無窮之恨。臣等以此憤惋鬱怒。奮不顧身。必刺鄙夫。以報君仇。而尚忍詢抑志。以至踰年未殪。非敢後也。時未至也。嗚呼。吾大父吉兵衛。始仕霜臺。受公子采女君之遇。由是吾父總兵衛。事前内匠君。甚見昵近。以至不肖某。繼事先君。有年。雖不敢私不次之寵。然因父祖之績。荷世祿之厚。以養妻子。畜婢僕。其沐君恩也。亦已多矣。今也從同志義士。相與蹈白刃。決必死。上有以報君主之恩。下無以辱人臣之義。豈非臣大幸歟。冀賴先君之靈。

十五歲。

得義央父子首。獻之影堂。和俗葬送。無貴賤皆用浮屠。既葬。托牌位。若影於寺。寘諸佛堂龕中。臣等所祈。在是而已。不勝欣躍之至。綴野詩一絕。以述其志。身寄浮雲滄海東。久慈恩義世塵中。看花對月無窮恨。散作曉天草木風。直清按此詩序。原文甚為疎淺。不成章法。蓋以和俗不解文法。自老師宿儒已然。無怪乎武人之拙於文辭也。

可讀如此。死時年四十六。

岡野包秀（カヅヒデ）　號金右衛門。秩二百石。無職。死時年二十四。

附包秀父某。亦號金右衛門。與衆同盟者也。去赤穗後。以疾死。世俗多襲父號。其事必在父即世之後。包秀父存時。稱九十郎。至父死。因稱其號。以見繼父志之意也。

貝賀友信　號彌左衛門。吉田兼亮弟。出嗣貝賀氏。秩二十五石。管庫（此云藏奉行）死時年五十四。

大高忠雄　號源五。秩百石。近侍祇候。（此云近習）忠雄母寡居。剃髮爲尼。曰貞立。寔小野寺秀和之姊也。赤穗之滅也。忠雄留母於家。適京。至明年九月。遂去京赴東都。貽母書曰。其兄弟所以違膝下千里而東者。一在復先君之仇。以雪本藩之恥。一在明人臣之義。不辱父祖之名。此其宿昔心事。所嘗爲大

惟懇云。忠雄寄母真筆。不破其所藏者。余嘗得觀之。其忠孝之節烈。宛然于心畫者。令人感泣不能讀了。更借其謄本。謹寫以跡之。今附于此。可以與本文併視焉。

以上ら完

一形のそなわりやすく。かなでをもかくうつしたるなり。一をもってこの孫のいきどおりをさんなぐ因つて。家のたちもとくそれ

人道也。今復略陳情素如左。當先君之時。群臣身
居重職。被深恩者。於今歷々可數。其兄弟。位卑分
賤。非有恩罷。以顯於衆。而大人老侍養於家。使其
苟全性命。隱居而終。蔽水之歡。亦非世所指名也。
然區々之心。所不忍者。嘗爲侍從之臣。朝夕執事
先君左右。儼然其容。靄然其言。至今猶在夢寐。不
能忘也。且夫棄封疾之富。不顧社稷之重。而自快
於羣弱之吉良氏。此必有大不可忍者。意先君計
之於心。熟矣。孰謂倉卒之間。舉事不克。而身被刑
戮首足異處。雖命數之極。無可奈何。然天下之可

爲痛恨太息者。豈有以加於此哉。想先君臨終之
時。當自抱無窮之恨。冤結以絶。紆鬱膈臆。夫誰告
訴。某等每一念至此。未嘗不叩心絶氣。痛浹骨髓。
竊謂先君。於是不爲無過。何者。燕饗非擅兵之日。
公庭非爭鬪之地。此二禁者。先君兩犯之。豈以忿
怒之故。不服自顧於此耶。朝廷罪之以法。固當矣。
故某等。謹以城邑上入於官。視去國。如去傳舍。所
以謝先君之過。服朝廷之義。不敢自比逆亂之徒。
雖然。先君非病狂喪心之人。實以有深怨積怒於
吉良氏。寧與之俱亡而不悔。嗚呼君仇如此。而爲

方丁可仗之事也。大學候
以之臣者。坐而視之。不以死報。可謂國有人耶。但以
大學君幽囚於家。廢舉未可知。日夜庶幾朝廷少
赦吉良氏。以為大學君之地。然後命之爵位賜之
土田。使之有以繼先君之後。則是先君身死。而家
存也。苟使社稷不亡。宗廟之祭不絶。先君之靈。亦
將有所依賴而安矣。如某等之徒。退而自殺可也。
自逃山林。以竢死可也。是故隱忍不發。以曠時月
之間。身處困辱而不辭。蓋其心在於存社稷為重
也。自大學君安置之命下。然後某等失望朝廷。而
其復仇之謀始決。夫國之興廢。有命焉。事之反

覆未易測也。使天悔禍我赤穗之國。大學君之興
不可知。然某等竊見朝廷處置已定。先君之祭絶
於今日。至此而猶曰有待焉云者。此但為偷生苟
免之計耳。衆或謂。今當共詣闕乞為先君立後。不
可。然後歸死於仇家未晚也。此議亦不為無理。然
堂々朝廷。大號一出。加於天下。不應更以寒士之
言反之。且有請而不得命。因為復仇之舉。是讐朝
廷也。恐其於事無所輕重。適足以貽淺野氏之禍
耳。此某等所為先君復仇者。豈有少望朝廷之心
哉。以盡忠所事也。然朝廷追罪某等。以大逆無道。

牧二其父母妻子一。致二之於法一。人臣之義亦所二不辭一。自
始謀事之日一。嘗有二一策一。以獻二大人一。他日有如緩急一。
大人以二平生之言一自處。不至二先事自裁一。萬々所望
在是爾。嗚呼言及此使二人爲一之惕息精爽飛越一。然
使二大人悲哀憂沈一。如二世婦女一。某兄弟亦方寸迷亂一。
喪二失其所一以爲一心。賴大人之賢明一。嘗勉二某兄弟一以
義。其言曰。汝等上無二負爾君一。下無二辱爾先一。吾復何
悲。某兄弟夫復何心。能不二欣躍一。生則勇氣有倍。死
則魂魄以安。此皆大人之賜也。豈非二不幸中之大
幸一歟。在此屢與二秀富一言而樂之。秀富忠雄母弟。小野寺秀和。養爲子

自古兵之勝敗。在二勇怯一。而不二在衆寡一。某等與二仇家
相遇一。其以二寡破一衆也必矣。況某年三十一。秀富年
二十七。包秀年二十三。包秀姓岡野氏。忠雄娚子。是三人者皆
以二鼎盛之年一。加之兼人之勇一。先登力戰。無二不摧陷一。
誰敢當二我鋒一者。其視二仇人一几上肉也。將下取二此一朝
貴之首一。爲二闔閭王之贈一。以耀二金簿之觀一。金簿言二闔王
鬼簿一錄二泉客一也。此等鄙俗之語。武人好二道之一。下文
事佛營二来世一。亦倣此。武人未二必信一浮屠之言。但平
素不學無識。溺二於俗習一。自出二此等之語一耳。豈不快哉。願大人無二以爲一憂。
但所二悲者一。大人老遭二困厄一。煢々獨立。遑々安往。奈
何有二子如一此。而使二母爲一無告之人一。某等不孝之罪。

亦已大矣。然士不幸而遇君親之難。不必爲君。不必爲親。惟義所在。故其急於爲親也。或有去官棄職。竊負父母而逃之。寧得罪於君而不悔。其急於爲君也。或有滅親覆族。以赴國家之急者。雖絶父母之命而不恤。其所以然者何。亦以所謂義者不可違故也。此大人所素通知者。豈煩某一二之言哉。大人既剃髮爲出世之身。宜朝夕事佛。務營來世之謀。以消今日之哀。遇良辰佳日。步行詣寺。亦於節宣其氣爲宜。時飲食。謹疾病。日夜自愛。以終天年。囿野氏娚。忠雄娚。適囿野氏者。寔包秀之母也。及甥女阿專等。

△菽水 禮記 孔子曰。啜菽飲水盡其歡。斯之謂孝。

△左丘明 左氏傳序 左丘明。受經於仲尼。以著春秋左氏傳。

△太史公 索隱序 史記者。漢太史司馬遷父子。繼春秋而纂是史。其褒貶毀實。頗亞於丘明之書。

△趙包 後漢書 趙包遷遼東太守。鮮卑入居。包母妻子爲所劫質。包率騎二萬與賊對陣。母遥謂曰。人各有命。何得相顧。以虧忠義。昔王陵母。伏劒以固其志。爾其勉之。包即時進戰。賊悉摧破。其母妻皆爲所害。下畧

△徐庶 三國志 蜀先主。率衆南行。亮與徐庶並從。爲曹公所追破。獲庶母。庶辭先主曰。今已失老母。方寸亂矣。無益於事。請從此別。遂詣曹公云々。

△源義朝 日本外史 保元之亂。有詔令義朝斬父爲義云々。義朝意決。使政家誘殺之。自奉其首詣闕。

△松田 同書 後北條臣憲秀。通款於秀吉。欲導敵兵阿專包秀妹。大人率以義教之。不令過哀。其乳母亦頗知書。大人相勉無以某故自損。嗚呼言有盡而情無盡。今當永訣。臨紙涕泣。不知所云。此書原文以國語為之。今取其意譯之。獨恨無左丘明太史公之筆力以褒之爾。但其所謂人臣急於爲君。絶父母之命。不恤云者。不知所指爲何等事。若謂人臣爲君。守節。其父母爲敵獲。不遑恤焉。則猶之可也。然先儒不是趙包而非之。獨恨無左丘明太史公之筆力以褒之爾。但其所謂人臣急於爲君。絶父母之命。不恤云者。不知所指爲何等事。若謂人臣爲君。守節。其父母爲敵獲。不遑恤焉。則猶之可也。然先儒不是趙包而非之。徐庶。蓋以父母天性之親。雖國事之重。而莫之奪也。包秀。安危所係。宜其摧輕重而審處之。不可以一途繁論耳。余詳忠雄之所言。其語意似謂人臣奉君有不得已。加害其父母。若本朝源義朝及近世北條氏臣。松田左馬助之徒。此害天倫。甚者。忠雄豈以爲人臣處變之道當然耶。蓋忠雄之徒。皆武人無學術。唯知宗武田之術。習孫吳之兵。故其所見之鄙陋褻俗如此。亦可惜也。然近世士大夫。立人之本朝。徒知懷居貪祿而已。至於仗節死義。則視以爲度外之事。往々皆是。

入城告之少子英春。英春驒泣固諫。憲秀弗聽。因告氏直。氏直誅憲秀。及氏政自裁。秀吉宥氏直。令率英春等入高野山。給以祿。氏直卒後。英春去仕前田氏。○英春即松田左馬助也。詳於小田原軍記。

△武田之術 同書 武田晴信。後削髮稱信玄。源義光裔。及信玄。海內割據。信玄最精巧兵法。群雄無敵者。惟有上杉謙信耳。世言兵法。並稱二家云。

△孫吳之兵 史記 孫子武者。齊人也。以兵法見吳王闔廬。卒以為將。破彊楚。威齊晉。顯名諸侯。吳起者。衛人也。好用兵。之魯學兵法。又事魏文侯。又去魏而之楚。平百越。并陳蔡。劫三晉。伐秦。諸侯恐。楚彊。

鳩巢小說 武林唯七。本姓孟氏。祖父二寬。初鮮の役。明國より援兵ニ來る。我兵ニ捕る。當と業として。武林次番と称す。明曆ニ年ニ歿とん。

某氏記 末期述取捨義武林唯七
三十年來一夢中。捨身取義夢尚同。雙親臥病故鄉在。取義捨身夢共同。

今赤穗以蕞爾之國。其俗有氣概。尚名節。故其臨終言志。一曰所謂義者。不可忘。亦足以見平生所存矣。嗚呼宜哉。其能不知何姓。其所居之里。曰武林。文祿中。豐臣氏有事於朝鮮。隆重先世。爲我師所獲。其子孫遂爲日東人。始以先世所出之地爲氏云。赤穗義衆。攻吉良氏。手刃義央此人也。其囚於毛利氏。有詩。曰。三十年來一夢中。捨生取義幾人同。家鄉臥病雙親在。取義捨身夢共同。毛利家臣。一擊不殊。事於朝鮮。隆重先世。爲我師所獲。其子孫遂爲日東人。始以先世所出之地爲氏云。赤穗義衆。攻吉良氏。手刃義央此人也。其囚於毛利氏。有詩。曰。三十年來一夢中。捨生取義幾人同。家鄉臥病雙親在。取義捨身夢共同。毛利家臣。一擊不殊。其相者曰榊原莊左衛門。毛利家臣。一擊爲度。不然重傷。不勝其任。隆重僵前。顏色自若。乃凡隕首一擊爲度。不然重傷。不勝其任。隆重僵前。顏色自若。乃苦其人。以爲不勝其任。隆重僵前。顏色自若。乃起坐。顧謂莊左衛門曰。君徐之。莊左衛門曰。諾。聲未盡。首已隕。見者感隆重臨死閑暇。又稱莊左衛門。雖失於前。能詳於後。相傳以爲美談。死時年三

以上十人除附錄入。下倣之。賜死隱岐守。松山侯邸。

岡嶋常樹（ツネタツ） 號八十右衛門。原元辰弟。出嗣岡嶋氏。領會計。此云勘定頭 死時年三十八 以下秩祿闕

吉田兼貞 號澤右衛門。兼亮子。無職。死時年二十九。

武林隆重 號唯七。近侍祇候。隆重之先。朝鮮人也。

十二。

倉橋武幸（タケユキ）　踈傳助。近侍祇候。死時年三十四。

村松秀直　踈喜兵衛。守廳此云。間役。廣赤穗既亡之後。

剃髮隱於豎。自稱曰隆圓。以妻子來居東都下。衆

方政吉良氏。秀直慷慨赴之。乃作歌曰。命爾毛命音以

乃不易二音加壹遠壹音奈波忘音爾

知漸奴比尭都忘音倭須礼逋音計

隱天毛音加俱礼此遠音箇々逃無音乃加礼死時年六十

二。神崎則休筆記中。載同盟士姓名。與此所載無異。但稱秀直。曰入道隆圓。和俗既死。用浮屠法。

剃髮受法諱。亦有年老自髡。命名者。稱之曰入道名。蓋亦以近世業豎者多倣此以為常。今秀直剃髮改

自晦者也。豎

杉野治房　踈十平次。近侍祇候。死時年二十八。

勝田武尭（タケタカ）　踈新左衛門。無職。死時年二十四。

前原宗房　踈爲助。掌金銀出納。此云。奉行。金初良雄在

京師。使宗房及神崎則休。先詣東都謀仇家。明年

良雄等相率而東。以二人爲主人。及其擊仇前一

月。則休令宗房畧記國難本末。以貽故鄉族人。至

其分註逋逃臣。姓名行事者。則休自爲之。其志將

明節義。正汚名。以愧後世爲人臣失節者。亦豫讓

之心也。而水村貞行。又跋其卷後。以述二子之志。

名曰赤城同盟傳畧。世或傳焉。死時年四十。

惟淵云。俗傳載治房母以死勸復讐事。未詳其確實。姑書之。以俟後考。

為助。諸書皆作伊助。按為與伊同音。故誤乎。

間光風（分注ソヨカゼ）　號二新六一。光延次子。無職。死時年二十四。據二休所一レ記。光風亦與二不破正種一同以二罪去一レ國。及二辛已之難一來。後二父兄一歸義。不レ知二世所一レ稱。良雄爲二正種一告二墓者一。光風亦共之耶。

小野寺秀富　號二幸右衛門一。秀和養子。本姓大高氏。與二其兄忠雄一皆秀和姊子也。秀和無レ子。以二秀富一爲レ後。無職。死時年二十八一。

以上十人。賜二死甲斐守長府侯邸一。

間光興（分注ソヨカゲ）　號二十二郎一。光延長子。無職。死時年二十六一。

奥田行高　號二貞右衛門一。重盛子。無職。死時年二十六一。

△成童。已見二于良金答一レ水野小左衛門注一。

矢頭教兼（分注カヤ）　號二右衛門七一。無職。教兼方成童。以二父蔭一レ舉爲二內豎一。後一年國難作。良雄哀二其幼父子就一レ死。謂二教兼一曰。卿父長助赴レ之。良雄哀二其幼父子就一レ死。謂二教兼一曰。卿年弱。仕亦日淺。不レ與レ盟可也。教兼曰。家君徇レ難。僕縱不レ仕。義不二可獨免一。況其仕レ國已一年。委質爲レ臣。無二以異一於諸君一也。公豈少二僕謂一不レ足二與盟一耶。請先二諸君一死。乃引レ刀將二自殺一。衆遽止レ之。良雄泣下。與レ之盟。死時年十八一。

附教兼父某。號二長助一。亦與二衆同一レ盟。者也。去二赤穗一後以レ疾死。

報讐錄　教兼父長助。病將レ死。授二甲一領于教兼一曰。汝克從二內藏介一。以濟二復讐一。教兼奉二其言一。及二入一レ讐第一。書二父法名一。藏二諸鐵塊之中一云。

東涯。又曰。孟子曰。所欲有甚於生者。所悪有甚於死者。非獨賢者有是心也。人皆有之。賢者能勿喪耳。為

村松高直　號三大夫。秀直子。無職。死時年二十七。

間瀬正辰　號孫九郎。正明子。無職。死時年二十三。

茅野常成　號和助。監察。死時年三十七。

附

茅野某。號三平。橋本某。號平左衛門。亦皆與衆同盟者也。二人獨患復仇事難成。欲急以死徇國。其去赤穂之明年正月十四日。三平先衆自殺。平左衛門亦尋自殺。直清按。三平與常成同姓。豈其族人耶。常成去美作来赤穂。亦疑依三平以為主也。今并平左衛門。附録于此。

補　東涯文集

萱野三平名重實其先出于鎮守府将軍源頼光。頼光裔孫。左京大夫頼益。方源右将

士者委質事君。死生以之。君不得死。而己偷安苟生。豈其本心哉。浅野侯。輙觸憲綱。覆其宗社。事固不可追咎也。欲敵其嬴無計可為。唯有死耳。三平氏之志亦可憫也。近者其嗣子長好。録其世次事状之大畧。屬予作傳。謂世言乃父祖子愛。泥其義舉。此傳聞之謬也。顧憑大手。以表實蹟。仍為傳。又誌于其後。長好今仕伊丹。與萱野相近云。

重勝聞書　[illegible]

時。食邑攝州萱野郷。遂氏焉。其後若干世。至名恒産。始臣事于大嶋家。及子恒重。孫重利。相繼襲禄。重實者。重利第二子也。甫十三。因大嶋羽州之薦。仕浅野内匠侯長矩于播州赤穂。鎮擢列近職。元禄十四年春。天使東下。侯為館伴。吉良義英朝臣。以閥閲之家。掌勅使祗應之事。時職名高家。侯有憾于朝臣。三月十四日。衙參之日。刄傷其額。坐大不敬。即保管于田村右京侯第。即日没其封邑。賜自盡。重實時從侯在第。與早水満堯。乗傳告變于赤穂。路由萱野。遇有衆送喪而過。問之則曰。萱野

重利妻也。不意凶變悲駭兼至。乃曰。今爲君告急。又罹母艱。將奈之何。敢以私情。而緩公事哉。揮鞭而去。遂造播州。告其由于城中諸士。既而官遣監使。收其城及邑里。先是城中諸士。皆將幷命以從主。衆志不一。或依或違。重實終始矢心。不貳其言。倡率義旅。將成君志。時在山州山科鄉。相距十里餘。時々過存。密圖報復。至冬。重實辭父。將東行求仕。父不許曰。予籌汝之心。汝非干祿也。將以刃仇家。以敵乃懷。若有其事。吾族不足恤也。恐累及吾主。吾之思我君。猶汝之思汝君也。重實再請曰。願絶吾籍。何畏相累。父又不許曰。絶骨肉之恩。以防禍患。薄俗之所爲。何可效尤。吾非勸汝死也。唯欲汝之遂志焉耳。重實從其言而止。不復東行。至明年正月十四日。乃先內匠侯忌日也。前夕命僕齎一通書。往良雄許。浴盥謁父及嫂。談笑如常。而就寢。及明日加辰。而房戶不開。家人怪訝排戶而入。則東嚮自裁而死。家人錯愕走報于父。父戒其

若干人。其後何如也。
之年又有浪人數輩之來訪。
之年之何方へ行去。
其去之後之消息。
之年志を忖りる中。右之書通いつゝ。因通次第一同忠之自殺
致しんと。其書中に。
寺坂談　萱野三平。討入の時上下二ヶ所に別れ。
引揚之後。連判お作り一次之返
答之有之。其節。矢頭
右衛門七。自滅致候事。

△拔山云々。既見于泉岳寺。大高忠雄。諸句注。

△漢樊噲。筑紫八郎。史記前漢樊噲。沛人。從高祖定天下。初帝已定關中。項王至。怒欲擊帝。帝見羽鴻門。噲聞事急。持盾直入。怒甚。羽壯之賜以巵酒彘肩。云々。日本外史源為義第八子曰為朝。善射。幼凌犯諸兄。為義逐之豊後。曰鎮西八郎。自稱九國總追補使。數與諸大姓戰。比十五歲。遂盡伏九國。云々。益宗利自比勇壯于二人而言之耳。

△壎篪詩經伯氏吹壎。仲氏吹篪。注言其心相親愛。而聲相應和也。

△以鹿為馬史記秦趙高。以拔山蓋世之雄。猶不能無帳中之泣。豈可以此議天下之勇士哉。若夫被堅執銳。所當無敵。雖漢樊噲。筑紫八郎君。八郎源為朝君謂吾未必遽出其下。況於吉良上杉之兵乎。願爲公等。能壯天下之耳目。不至辱四方之遠聽。又列叙忠義員盟者姓名。乃歎曰。嗚呼狗鼠之輩。何足道哉。但恐吾徒既死之後。此輩更相壎篪。以鹿爲馬。自掩已負國苟免之罪。而乃公然誣其等。以爲匹夫匹婦之爲諒。此吾所恨也。故且錄于此。使公等知之。又曰。方今四國無鋒鏑之恐。上下相安。君臣相樂。而我內匹君。獨勿泄。曰。若宣于衆。恐敗多士之事。乃以暴死。聞于世。遷瘞于旁近山中。向遣良雄者。到山科時。尚未明。良雄啓函大駭。召同志在近側者。感其情義。歎詫之聲聞于外。則與自盡同其時也。死時年二十八。別歸消泉。

橫川宗利　歸勘平。先驅士。此云徒行。宗利爲人忼慨。常好勇尚氣節。其赴吉良氏前一月。與故人書有曰。平日自許以天下之健者。唯某等爲然。今也忽忘下何如人。乃做兒女子之態。然臨別而悲。人之常情。

持鹿獻於二世一曰。馬也。二世問二左右一。或言レ馬者。高以レ法。云々。

惟淨按。宗利手簡。諸書所レ載有二小差一。而文意無二小異一。其寄二赤穂三原屋某一書中曰。訣別之遺書。作數通。以寄二各家一。故不レ能詳也。蓋所二以有一小差一者。在二于此一耳。赤穂前川某。所二惠贈一者。刺其真筆而赤松滄洲跋之。足レ可二以取一證矣。因今附載其書于本文。併錄其跋文于左。

節義之感二人心一。無二古今一也。其在二近世一最較著者。莫レ如四十餘士復讐也。在二古唯田氏海島五百八一可レ以相似一。而四十餘士衆心一舟窺二間待一レ時。其間千辛萬苦。不レ可二勝言一。非二若海島五百人一時決レ死。則不二亦尤難一乎。談及二此事一。雖二庸人愚婦一。莫レ不二感泣一焉。是以其手書遺墨存今日一者。使二人珎藏一。況若二橫川子此書一。事機已促迫。猶能手寫曲盡二事情一。可レ謂二奇珎一矣。岐豊行偶得レ之。如レ得二至寶一。携来示レ余。且乞附二一言一。乃書以歸レ之。

寛政九年丁巳孟春
七十七翁赤松鴻識

以二一朝之故一。棄捐百年之歡。身僵二兵刃一。禍及二社稷一。使人至死。猶不レ能レ忘レ情於此一。悲夫。某等事二主於太平之日一。方欲レ以奉觴獻壽。而忽與二禍會一。相從泉下一。雖不レ能無二區々遺恨一。然有レ生必死。縱某等以壽終於牖下一。亦不レ過享二三四十年煖飽之樂一。孰與施二勇烈之譽於天下一。明二忠義之道於後世一。身死名存。庶幾古人而無レ愧。某之愚竊謂。猶二瓦石之賤一。易二金玉之貴一也。尚何遺恨之有。故人幸有二以察一レ某等之意一。此書原文以二國語一為レ之。京師人或獲二宗利親書一者。甚珎異焉。直清嚮者。從二友人一猶若二水借一焉而觀レ之。墨色淋漓。手澤尚新。與二世之所一レ傳者一。大同小異。蓋當日並裁二通一。以與二兩家一。而其文有二小詳

畧一耳。死時年三十七。

（補）一本按上云。其後上杉家發存。時今在二米澤一。

淨堅固之孫。

中八万石之高。

存命し候も哀れ相應の死にも不レ及云々。

於二此一も二計書狀一淨昭之二筆跡一なる事明白なり。

なれ。又書

如レ此と。忠烈十人之後。本石之一ニて三百人之勇士扶助と

○信行筆記中。有録義人潜處。変名者。足可以想見當時之刻苦矣因就録白附記之

右町小山屋治右衛門

大石主税之頃より内匠頭之時分より出入仕候

又ハ　内田文左衛門之弟内田平左衛門

近松勘六之妻　清助

小野寺十内之妻　仙助

又ハ　三村次郎右衛門

自情ニ而ハ。不日ニ命ニ迫ん事ハ。不可也。本も思ひ切ニ。毎ニ人ハ。かゝる物ニ。志ニ而ハ。かゝる事ハ。出来ぬもの。ニ候。常ニ。御心ニ掛ケ。折ニ触レ。事ニ臨ミ。義ニ当リ。能ク〳〵御工夫可有之候。

右ニ付。拙者ニ於ても。常ニ心掛ケ罷在候。

大石内蔵助。同主税。吉田忠左。同沢右。原宗右。

片岡源五右。間瀬久太夫。同孫九郎。小野寺十内。

同新六。千馬三郎兵衛。菅谷半之丞。同十次郎。

近松勘六。大石瀬左。中村勘助。富森助右衛門。

矢田五郎右衛門。奥田孫大夫。同小平。堀口弥一右衛門。

同安兵衛。武林唯七。茅野和助。大高源吾。間喜兵衛。

不破数右衛門。毛利小平太。村松喜兵衛。同三太夫。

又ハ　吉田忠左衛門

又ハ　大石主税

二村ニ下ル。天正作也。家号ハ吉乃屋。俗ニ呼テ糸屋ト云。

家系ノ事。祖父ハ高人ニ仕ヘシ人ニシテ

歌ヲ能ス。志ノ学ビ入。拾ヲ多ク読。其外ノ著述多シ。

今茲四番目人ニシテ吉ヲ用ユ」ト云ヒ考ヘ悟。中村ニ住ス。

玉田利平次。此人家ノ門ニ吉ノ字ヲ書ス。又

元ヘ丸山ニ住ス。後ニ同。色ヲ通シ志ヲ忘レ。利平次ハ

ヒトリ女ノ子アリ。年八ツ。母ニ似ス。美ナリ。

田中貞四郎ト云ヒシ者十三ノ春

ヨリ来テ奉公中ニ入ル。イマニ居ル。拾ノ弟子ナリ。

大野辺ニ住ス。ヒトリ娘アリ。相応ノ者

ヲ聟ニ取ル。同新ニ引越ス。

菊屋助右衛門。杜ノ北ニ住ス。

芝通リ原橋ノ西ニ住ス。

天田久右衛門。橋ノ東ニ住ス。

初ハ八丁畷ニ住ス。後ニ町ヘ移ル。

村松重右衛門。村ノ東ニ住ス。

源川原ニ住ス。

南ノ端ニ住ス。

栗田友右衛門。村ノ丹下ニ住ス。

又ハ芝ノ西ニ住ス。

栗田孫左衛門。西村ニ住ス。

芝ノ西ニ住ス。

役ノ下ニ住ス。

又ハ村松ノ東ニ住ス。

芋畑ノ西ニ住ス。

十左衛門。芋畑ノ北ニ住ス。

南ノ端ニ住ス。

栗本ノ子ニ一人ヲ養子ニ遣ス。

居ヲ大学屋敷ト称ス。

菊助ノ家ニ有ヲ以テ

其ノ屋ヲ売ル。

ソノ屋ニ移ル。

一粒ノ勤ヲ以テ

奴ノ。南ノ畝ヲ

いつしか

ひとりの

打曲ル。

栗本ノ子ニ一人ヲ養子ニ遣ス。

居ヲ大学屋敷ト称ス。

菊助ノ家ニ有ヲ以テ

其ノ屋ヲ売ル。

ソノ屋ニ移ル。

一粒ノ勤ヲ以テ

奴ノ。南ノ畝ヲ

いつしか

ひとりの

打曲ル。

仁左衛門
貞賢ト称ス
大石瀬左衛門
知行弐百石
父ト共ニ切腹
又八
同断
田中貞四郎
切腹
本町林町紀伊国屋敷
磯谷孫四郎
手利左平次
父子共ニ
横川勘平
赤穂ニテ百石
小山田庄右衛門
中村清右衛門
本町三丁目横町紀伊国屋敷
勝田新左衛門
武林唯七
本町二丁目
茅野和助
弟ニ
大高源五
赤穂ニテ
寺坂吉右衛門

大高源五
雲村俳名
松うきよ
其ゝ物好
そゝ不自
色ヲ楽ひ。
妻房ヲ
奥平ノ監
てもなし
ハうるゝ
ふるゝ。
ひとりふ
ちと改ム。
笑止な

元ハ上野介殿。裏門ヨリ逃ケ出シ小屋ヲ
上野介殿ト心得ヲ入ラセ玉ヒ。庄左衛
門ノ指図ノ如ク掛ヶ上野介殿ヲ討入リ
トモ指ト答ヘ是ヲ見付ケ玉ヒ。
時ニ扨ハ用心ノ体ニテ。仕損ジ玉ヒ
成ル。彼仁ノ面体ヲ下ニ知テ。途
中ヲ付廻ヒ玉ヒシトヤラン。
ホノ方ヘ参ルノヲ。ソノ方ヘ行ケ
ヤラ何ナク有シニハ。扨平服ニテ
家来ニテ。名ヲ名乗ラレハ怪キ
者ニテ名ヲ不申モ有シ。
外ヨリ五郎。年ノ春ヨリ江戸ニ
町ニ宿ヲ移ス。ソノ中迫間殿ヘモ
奉公ニ参ル。町ノ法ニテ不会ヲ
ヨリ名乗ル。秋ノ
ヨリ来町ヘ引移ル。右ハ終ヲ
ヲ知ラズ。
惟照按。義衆不載名者。恐
属脱漏歟。不義士列名。蓋
當日従義士来寓者。及臨
事而遁亡也。

小山田庄右衛門
ゞれいとして、
平野中平。
れ。宗教ヲ
同志ニ
膳病ニ
上侍ニ
中ゝ。
仁平ニ
名物八
ふ。法山寺ニ来。後ニ角ニ。川田八ニ来。

赤穂實錄　泉岳寺ニ神佛ヲ祭ル所ノ無ケレバ其ノ墓ヲ拜スベキ
ヨシモ又詩傳于諸書者ニ其詞氣應ニ非ニ僞作ニ錄以俟ニ後考ニ

空去ニ赤城窺ニ敵鄽ニ同志試

又衆屯酬。生前擯扇負薪
孰。崎與五郎源則休。

不辱ニ去就ニ召見二人ニ任用之。居無何有ニ國難ニ二人
死之。衆謂二人爲ニ知己ニ死。不愧ニ古人之義ニ。直清謂此一事。
亦可ニ見ニ赤穂疾好士ニ。又尚節義ニ。其得ニ衆死力ニ亦宜矣。死時年三十八。

三村包常　號次郎左衛門ニ。雜事掌務此云ニ小役人ニ　死時
年三十七。

補報讐錄　衆之在ニ赤穂會議ニ。偶呼酒。包常執ニ注而
進ニ。衆掩ニ盟冊ニ。不令ニ覩ニ。包常曰。風聞諸公有ニ結ニ義之
計ニ。雖ニ以僕賤ニ。願勿ニ外焉。衆笑曰。匪ニ汝所ニ知也。包常
色怒曰。今段之事。豈有ニ貴賤ニ。請不已。良雄隔ニ障坐ニ。
聞之曰。次郎左衛門言是也。我不ニ遺ニ汝ニ。自後數命

以事。包常奔走弗懈。衆猶謂覬賞已。至此死節。

附

寺坂信行　　鞆吉右衛門。以疾家步卒。步卒此云足輕。屬

吉田兼亮部下。或曰。信行以弓手步卒。屬原元辰部下。大石良雄。嘗使信行投子良金射。直清以信行筆記考之。信行實為屬吉田兼亮部下者。其屬原元辰者。矢野伊助也。非信行也。

信行筆記　私後上京不知居處。行年七十一回。古稀。川柳云。義士の名を一回ずつ出し。此年も殘る上に此年。又名を出す中に殘る。

元祿十七年辛申九月　寺坂吉右衛門信行

杉板二枚

重勝聞書　忠左衛門事。夜ニ入。此者ハ不存ものゆへ。夜ニ入ハ。大石氏書狀の古状ニ。寺坂吉右衛門事。夜ニ入。此者ハ不存ものゆへ。夜ニ入ハ。古状ニ。寺坂吉右衛門事。夜ニ入。此者ハ不存ものゆへ。夜ニ入ハ。

惟淑按。義衆秘信行而上者。懼累長廣也。故語人必以遁亡。其實自藝州歸後。依兼亮女壻伊藤氏者。詳于寺坂談據之。本註。大石氏答監察之語。知為謬傳矣。信行墓在武州麻布曹溪寺。其表錄于左。

寺坂吉右衛門諱信行。事故淺野侯於播州赤穗城。為吉田兼亮之屬吏。其為人也朴實敦厚。事君而忠。與朋友交。弃己如疢。方大石氏復讐之時。亦共與焉。抱氷握火。與衆共之。事敢遂矣。黨衆相議。而使信行報於先君之遺族。在藝州者。還則大石等。皆已就死矣。人口是碑。今不復贅。名正義精。無一可議也。而復事于山内主膳公。恩遇殊渥。高義薄天。雄節邁倫。世行即道上茶肆。更為旅裝。乃行至藝州。大學頭長廣留之不遣。至明年四月乃脱還。會赤穗義衆。以二月賜死。信行詣伯耆守仙石久尚。自陳與衆同罪。願與歸死。朝廷以事既徃不問。信行竟滅迹不見於世云。信行自藝州還。為羽田某。拓植某。以國語録十五年正月以後。所履歴事為一卷。其於吉田兼亮事。最致意焉。而旁及餘人。亦略録之。終無一語以及己事。但其末有曰。吉良氏之役。某亦執兵趨走於其間。有故中道別衆而西。不能與之共死。至今思之。以為終身之恨爾。實十六年五月事

稱其功。而至今不倦也。無子養信保為嗣。延享四年。丁卯冬。十月六日。羅疾而終焉。享年八十有三云。信保來請予誌于墓。亦信行之志也。因記其行事之畧。系之以銘。曰。身在下列。共耀忠誠。志既遂兮。遠邇傳聲。心迹共全。謂々之英。

寛延二年。其歲己巳。秋七月。

伊藤長隼誌

赤穗實録　泉岳寺武備の後。義士切腹の後。寺泉岳寺に葬る。公儀（幕府）切腹仕候中人々屋敷へ詰（守）の者。仍て泊り番仰付。心得仕候。惟熙又按。信行。老年為山内主膳所招。在江戸者。考之寺坂誌其為遊事也。明矣。

也。直清按。則休竹記同盟姓名。以信行列書不異於衆。及吉田兼亮等。告伯耆守仙石久尚云。同仇四十七人。亦并信行數之。故朝廷量員。令置四家。定以十七人。屬細川氏。使其餘三家各受十人相當。而信行適在屬水野氏衆中。會信行使藝州不在。其歸命仙石氏者。卅一人。當時監察官詰良雄。良雄曰。某命使事。非自逃去也。他日必至。吏遂信行附其下。以見原數。如此也。

以上九人。賜死監物岡崎侯邸。

久尚宣命曰。義周見父見殺。不能殊死赴救。為子無狀。以義周屬安藝守諏訪忠虎。置諸其封邑信州高嶋城下。忠虎遣家臣以義周歸。居數日。送之信州。吉良氏至是家絶。

六日有命。流大石良雄等子。十九人皆以幼弱。若仕他家。不與報仇事者。于伊豆海中。是曰大嶋閣老但馬守。秋元喬朝。國城在甲斐谷村。傳命市井長越前守保田某逮至司市局。此云町奉行所吉田兼亮子。曰傳内。年二十五。兼貞弟。間瀬正明子。曰定八。年二十。間瀬正辰弟。皆仕中務大輔本多氏家。本多氏名政武。國城在播磨姫路。中村正辰子。曰忠三郎。年關仕大和守。松平氏家。松平氏名基矩。國城在陸奥白川。村松秀直子。曰政右衛門。年二十三。高直弟。仕長門守。小笠原氏家。小笠原氏名某。供奉官長。此云扈従番頭。其餘幼

弱者。大石良雄子。曰吉千代。年十三。曰大三郎。年二。皆主税弟。

片岡高房子。曰新六。年十二。曰六之助。年九。原元辰子。曰十二郎。年五。富森正因子。曰長太郎。年二。不破正種子。曰某。年六。中村正辰子。曰勘次。年八。忠三郎弟。水村貞行子。曰總十郎。年九。曰次郎四郎。年八。大岡藤右衛門養為子。茅野常成子。曰奥田行高子。曰清十郎。年二。岡嶋常樹子。曰猪之助。年四。奥田孝先子。曰藤松。年十二。曰五郎助。年九。矢田助武子。曰作十郎。年九。或曰前二年。父助武以作十郎託東都士人家。甚聰慧。主人夫婦愛之如子。及助武賜死。主人恐作十郎哀慕其父。戒家人無以事告。作十郎畧已聞之。疑信相半。會司市遣吏至其家。令出之。主人夫婦親為作十郎結髮更衣。而告之曰。官命召汝試視容儀。猶人廣坐。必謹禮如平生。作十郎曰。自我聞父死。自

知不免久矣。今乃使我飾身如此。意官命下。令公殺我耶。公願明告我。何欺我為。主人夫婦聞之。相對流涕。乃相謂曰。悔吾為人養此子。嚮者不養此子。安見此事乎。遂扶載輿。令家人送之至府。既上堂。吏謂作十郎曰。汝雖幼亦脱佩刀如法。作十郎默思久之。請於吏曰。苟無害於法。願使我僕持之可乎。吏曰可。作十郎又下階。呼僕投刀。然後升進。衆感其舉動安詳不類幼年人。司市宣命已。乃遣還之。自是作十郎知父果死。日夜悲泣不已云。皆屬其主人親族養視。無主人親族者。令比鄰合力收養。待年至十五。乃放流之如命。或曰。中一人母抱育寓本莊。官令里人販鬻之。無何其母先刺殺兒。而後己亦自殺。以死未詳指為某人兒耳。或以為原十二郎弟。未知是否。四人至伊豆。放之海嶋乃還。

附節母義僕事

誠忠武鑑等俗傳。載元辰母以死勸報後事。又四十七士傳附錄。引明良洪範記其事曰。義人錄。載近松行重母事。亦與此相類。未知孰是。惟據按以本文元辰臨終歌推之。則似其母以義死者。鳩巢亦有疑于此。因今錄青山氏記于左。以俟後考。但行重母亦以死勸乎。未可知也。

原元辰母失其氏。赤穗既滅。元辰未去。良雄致書請來京師謀議。元辰語母曰。兒以事之京。而他日赴江戶淹留積日。亦未可知也。母曰。汝赴江戶。必當永訣。武夫世食厚祿。荷重恩。國有難則死以報之。固其分也。汝宜奮勇報仇。萬一失節。吾不復見汝。元辰曰。機事尚密。故與大石氏相議。雖至親不敢漏泄。是以不告。兒之所悲者。母既老而兒不能終養耳。言訖流漾。母怒曰。忠孝不得兩全。汝欲報君仇。安可以我為累。宜速行。元辰乃赴京師。會良雄嬰病。元辰看護。待其愈議事。良雄曰。事欲速成。則不得萬全。宜徐圖之。元辰乃還赤穗。見母告故。母默然。明日母卧不起。元辰使牌伺之。則伏刃矣。旁有遺書。曰。忠孝不得兩全。吾既為汝言之。今乃帰省。是不能忘情於我也。吾恐汝以吾故汚父祖之名。故以死勗汝。元辰悲慟。乃葬之而去。

赤穗之難。近松行重奉其母以來東都。寓諸族人之家。而已僦舍其側。晨夕省視。及其攻吉良氏。前一日。來告母曰。某等受國恩之深。大人所知也。義當死於赤穗。而尚不敢死者。欲且延生。以謀殺仇。而報先君之怨耳。今仇家適有可乘之機。衆議以時不可失。欲以明夜決死一舉。以果其志。身死固母曰。吾老矣。旦暮且死。幸聞我子死節。能與古人齊名。在我深以為喜。亦何悲。但恨子不早告我。使吾不知相見無何。而以平生待子。自今視之。不能無悔也。行重曰。嚮使大人聞之。恐哀憐不肖。以捐朝夕之歡。故不敢告。母曰。子之言亦然。乃起入房。久之不出。行重往視之。母已自刃以死。傍有遺書。告其子曰。吾恐子以老婦故。有所分慮。義氣不振。故先子死。以壹子報國之志。子其勉之。母敢後衆。行重觀書大慟哭。乃謂主人曰。吾窮阨無以續養。適與母語及此。母聞之有慼色。然吾不圖其有異慮如此。豈自悲其以餘生煩我。乃自殺耶。今悔之

△陵母 前漢書 王陵沛人。及高祖擊項羽以兵屬漢王。羽取陵母置軍中。以招陵。陵母私送使者曰。為語陵。善事漢王。妾以死送。遂伏劒而死。

重勝聞書 所載。近松行重僕甚三郎。與是同事。惟憑拠。高房僕亦有奇跡不可知也。雖然此記以文良事推則為行重僕不容疑。乃附載其傳。

或曰。何以不載近松勘六之小夫妻之事乎。曰。今所不取者。勘六夫妻之事。世所知也。且勘六之事。不可以為義人錄之用。今所取者。皆世所不知。而足以為義人錄之用。

無及。吾將趨告親友。請爲助喪。待至明日收葬之。

子爲我護尸可也。遂留書託治葬事。并封金若干。

置之尸傍乃去。直清謂。此與王陵母事相類。然陵母以死勉其子。捐生以報無後之主也。由是觀之。其過陵母也遠矣。

片岡高房有僕曰元助。自幼畜於高房家。執事甚謹。高房去赤穂。放遣婢僕。元助獨留不去。從高房來東都。朝夕執薪水之勞。出入奉事。不遺餘力。視之昔日有加焉。會擊仇之日迫。乃召元助謂曰。汝從我困阨之間久矣。吾求仕東都二年。爨柱炊玉。囊金且竭。顧當今諸侯不聘士。列國不請客。仕路

敲塞。無人薦達。欲且遊歷四方。傳食親屬故人家。以終年。今遣汝去。亦自爲治生之謀可也。所恨者無以報汝舊日之勞耳。元助曰主何出言如此。某爲主家所生育。主之不幸。某之不幸也。何忍棄主而去。爲他家之僕乎。主所往僕亦從。織席捆屨。盡力自効。高房曰。汝志吾固信之。然吾今餬口四方。身且不容。不可并汝仰食他人。汝忍從吾言。亦所以愛主也。元助曰。奴隷衣食易足。請自食其力。決不以身爲主累。主在彼寇與其同居。當就其側異居。但不離於主爲幸。三四強之不聽。觀其辭色。萬

無去意。高房不知所出。乃陽怒曰。吾以汝久事我。不欲遽失故意。故詐爲好語遣汝。汝猶不悟。不得不以實告。自去年去赤穗。汝事我不如平生。吾亦自忌貧窶。處心不直。視汝所爲。無一可吾意者。故深厭汝而逐之。汝速去。元助聞之泣曰。某事主十餘年。未嘗一日聞主忿言。而今如此。是某命盡之時也。乃趨而出。高房從其後。而往視之。元助欲自殺。操刃自當其腹。高房走而止之奪其刃。叱曰。奴不忠。何欲自生紛擾。元助曰。願聽某死。亦主之惠也。某既爲主所棄。尚欲爲誰生哉。高房令隣人守之。自往招同盟士數輩來。具語之故。皆歎曰。彼志可哀。盍告以擊仇事。令彼釋然。彼豈洩人言。以負信者耶。高房召元助。與數輩同告之。且曰。此事當秘。不欲顯言。故託辭他事以遣汝。亦有不得已者。汝不怨。元助曰。辱以密事告下賤。非愛某深能如是乎。嗚呼君恩之大。尊卑同之。某不負主猶主不負公家。願從主生死共之。高房曰。大石君戒衆。皆單身赴會。不許以奴僕自隨。吾如違衆。是吾以汝故負信得罪於衆也。元助憮然曰。謹聽命矣。某所以請從者。盡忠於主也。潔已之名。而爲主招譏。亦

焉用之。顧事主無日。一刻千金。必待至期。送主之行而後去。及期元助待高房出。乃篋橘撲之。行至吉良氏門外以候主。久之衆殺義央呼譟而出。元助見高房曰。果得仇人否。高房曰。汝在此。仇人已授首矣。元助曰幸甚。諸君良苦。得無渇。以橘與衆食之。高房趨之去。元助見高房赴泉岳寺。乃潸泣別去。不知所往。高房在細川氏邸。語及元助事。泣下。肥後侯聞之令人物色求之。遂不遇。

補 報讐録 先事死者四人。載誠中之盟 萱野三平。中小姓。長矩滅。歸依父于攝州萱野。父命冒繼他姓。固辭不聽。乃謂君讐不可復。父命不可從。自殺死。岡野金右衛門。與子包秀。同稱物頭並。禄二百石。病死。橋本平左衛門。禄百石。自殺死。後事死者。一人。小山田十兵衛。年八十一。前已致仕。薙髪骗一閑。長矩滅。來江府依女家。以子莊左衛門在盟中。心竊自喜。庚午十一月。莊左衛門盗片岡高房衣資亡去。事濟之後。府下傳良雄具名書。一閑始聞其逃節。自殺死。片林杢之助。禄千石。不應義盟。去居江府。辛未正月遷自殺死。家訴之。有司論以病狂。或勧使自殺。赴義赤穂者五人。岡野次太夫。井關德兵衛。井關紋左衛門。大岡清九郎。中

重勝聞書 四十六の誤。

村彌太之丞。右舊仕淺野氏者。擔甲赴赤穗請與死守。良雄曰。此舉非叛也。不宜納遊士。不許。前載盟。後逃節者。七十四人。或豫城中之盟。事散輒逃。或來京師。初協謀。後背去。或至江府。近期而亡。如寺坂吉右衛門。至十四日夜不知所之。故具名書列四十七人。

同書　常憲廟之薨。行赦釋淺野大學還江戶。大石良雄以下諸子。自流所還。年幼孩遣者。並蒙豁免。明年賜大學祿五百石。正德三年癸巳。安藝守松平吉重。授良雄子大三郎。祿千五百石。

鳩巢小說　小谷勉齋書。大石內藏助。實大石主稅。京都甲斐守叔家老。在坂須磨之浪宅。毋之所。在室之孔雀樓。內藏助。家人八侍。及仆從。送。廣島之淺野。分預。諸士。內藏助。與主稅。同預。一室。家屋敷。各別。一院之內。有二門。一出入。一守門。

大石氏書簡　寫林木工助。四月十八日。自滅。兄弟。流。矣之事。

追加

寺井玄溪　三宅觀瀾報讐錄

玄溪。父仕。出雲守本多政利。政利國除。因爲處士。玄溪居京師。以醫爲業。與寺最好。庚辰歲。始仕淺野長矩。從在江府。長矩敗。與衆至赤穗。遂退還京師。義舉之事。莫不參畫。及良雄東來。謂之曰。君臣之義雖無異同。而子仕前主。爲日殊淺。且子以醫人。爲衆所知。動足東發。必起人怪。請留爲理後事。以故玄溪不從。後諸國招辟。並不應。正德元年。病終京師云。

內海道億　以醫仕長矩。義士復讐之際。盡心其舉者。與玄溪頡頏。因取其行事於重

追加

勝聞書附載之。可以與玄溪參看焉。

吉田忠左衛門儀ハ三輪町ニ而内海道億と申者道之の門弟ニ而御座候。療治も功者ニ而。内匠頭方ニ罷出候處一乱の後。浪人ニ而療治ハ止ニ而御座候。在江戸の内ハ療治仕罷在候志のある者ニ而。剣術立寄候所別而懇ニ致候ニ付。合ひて申者と弟子ニ而御座候。人ニ致候事ニ而。今ハ在江戸ニ而京大坂抔ニ居候處ハ万事申遣し候由。京都ニ而ハ玄溪父子ニ而互ニ申遣し合候由ニ候。義士最後之後。内海道億抔大石内蔵助と之書の大封書状。原惣右衛門手跡ニ而憚ながら御座候。之て惣右衛門彩ニ而候。其後道億へ見せ候處。京都寺井

玄溪より參り書状之内。我等へ言候の由を切ぬき見せ申候。未九月廿五日。浦出立ニ而江戸へ罷立候。中略　十月十日従京都へ罷越し。玄溪宅へ参候。子息玄達も在宿ニ而緩々と語り申候。玄溪申候ハ。於江戸内海道億宅へ参候節。人ニ被成候而道億方ニ而申越候通。拙者深志致候者於捨者ニ御座候。内蔵助存命之内。極月十八日同廿四日當二月二日ニ通番細ニ御座候。内蔵助惣右衛門十内三人より二月二日之の書ハ番細ニ申越候。死後之事ハ惣右衛門殿ニ而京都ニ而刻形候と呉々申越候中ニ結構ニ存候。生涯忘兼候。他ニも不形及申候也。職御冥加至極難有存候。筆紙ニ難述。武運之叶候段。此上

不可有之と申様ニ候。雖有之候共今時私式ニと此式も存候也。
何事も草の陰にて悦ひ候と存候と申事ニ候。右之書状
見せ申候。我等中々不若候へ共此状共写し候て取置申
候ハ安き事にて則玄達執筆にて写し置候。其紙面
一筆令啓上候。兼而我等存念之通。今月十四日之夜同志
共催。吉良上野介屋敷へ推入。白家中出合候者ハ薙切
討捨。上野介殿討取。首ハ泉岳寺へ持参。亡君
之御墓へ備へ。本懐を遂候儀大慶不過之候。
ま文ニも御座候と存候。定而浮説ハ粗御聞及と存推察候。
此間当玄達老御登りて御苦労之段無申計候。付入候共。何卒

様子ハ玄達老も委細御聞届可被申候。猶追日可申上候。
付進候。当春以来段々御懇意之段無申計候。御命を存候処。
生涯忘れ不申候。他言不及申。御心底之程。誠以冥加至極難
半紙ニ仕合ニ存候。追而罪を可蒙手傳
存候。随分次第武運之叶候儀本望此上不可有之候。
右之通ニ付此書状大切ニ御封置候而。委細御推察可被下候。

十二月廿日

小野寺十内　判

原惣右衛門　判

大石内蔵助　判

寺井玄渓様　人々御中

寺坂之實跡既載于泉岳寺。及寺坂之上疊。可以參考焉。

惟懇接。本書追啓書尾。詳錄當日之事狀者。十數紙。載在山村某所輯赤穗書翰。及瑞光院什書。如其事則散見于是錄中。故今畧焉。據之玄溪編輯之書必有之矣。我未見之為可憾也。

追啓此書令次第。同志之者。着屬之同若干人。仕無滯儀之者。中在之人々。連々去就。和田志津馬方々おゐて行逢てより。揚州亀山赤穗寺坂吉右衛門儀十年目ニ行逢てより。彼屋敷ニて不逢候。

時き者々儀不及記。

逃る一札之事。遠山時帝之所處帝無紛。

為其此書付差上申候。以上。

又申入候。此方ニ居申候者之内ニ悪事仕無之候。面々ニ御法度不仕候様ニ被仰付可被下候。

右之文言之内ニ悪者之在事沙汰之仕候ニ付而。

儀ニ存込候ニ付而。我ふた名ニ而ハ無之候。

流布ニ候。又内蔵助ハ八月六日ニ書状見せ申候。我ホ中ニハ

兎ニ威儀と存候。

一筆致啓上候。兼而申候ニ付而。

別而致威儀候。拙者今度一同ニ下り候ニ付而。

此方ニ居候ニ付而。

破り候事ニ無之候。

候。国道仕候ニ付而。

候。

候。

候。

都白道狀當給と雖も。身命を厥ひ。名利を棄て。神ん之を。毀譽に。其時お免し。仕官を。平穩に。面作て。

ハ月六日　大石内藏助判

寺井玄渓招系

小野寺秀和妻　伴蕃蹊畤人傳

赤穂義士。小野寺十内秀和妻丹羽氏の女なり。

義氣風雅。偶ま其夫の汐を配し。物よむつほしかりける

名ハ。秀和。ちゝ綸旨の書うつくしたり。汐赤穂の雜な

逃りたる時。ことゝり因姓十兵衛へ給もる書よ。「老母妻

もし志ハ不ゆるし。松ちゝそさゝりなることも。もし

女ものそゝゆりて。もさのこさゝぐほしえてしるゝ。

下さるへくことゝ。又ゝ的年漫艸のあるを。」て後。松月

十二日妻へ給ふ。第一の松の維ゝ。

んゝゝき。

重勝聞書 潮田又之丞申候。小野寺十内妻の詫に付て歌を書申候。いやの彩り申候と申候。委細は此書付侍る候へ

世の中は定なく。移れバ変るならひぞ。心の働き
おりしまひと覚へは申候。申しく心あくなる今更かひ詮すとも
なくてぞよくうち立候。それにつけても其の思ひを思ひ
給ふべかりし。又二月三日の歌にも「そのつけも筆持ちまゐらせ候。
さりながらうつし置くそのこと夜昼しのび候ぎきと心あく
覚へ候。などのできさ落涙の涙にて其人かく書くる。めとより
此僧のみ法かひ多き中にも書かいされし数多て。其風雅
の手。中にも極月十二日の文に「此方の歌ともりさき和歌の
家衰のしようちを給ふとぞんし候。そこらとの家さえく
感じ入候。涙せきあへず人の見る気をおもひまさりて涙を

に進み候て辞世候ハ。十内妻女給ひて申候とて。辞ひなかり調へ申候。
始ての歌など涓の書のきていひかけ候ことの義ともなし
惟溯按。赤本文に秀和の名あり感じ入るとあるもの。恐くは此ならん

のせて心よりて筆を吟じ候。おくの如く補ひて申候。
見よつきても苦しき家に捨なくて其文よみ申さるべく候
とあるなど衰にせさしくして。復讐の事おこりて後。
此婦人の見へる家は秀和の名あるに感じ入とも見ゆし
そがひも侍はる平生に殊なりしは丈婦たるの家の
師とせし金勝慶安の身かりの人。見てる直筆の写を
見しに殺首ひき中。すきしある書出つ
なき人の墓に給し云書ありて 私按するに此亡人ハ秀和の母後に申ておゆ
きのみ寺に向ひて下しとのはに歩うそかも松の下風
ける風玻頭して

咲そむる赤山の桜色ひきて人おとろかしけるの昔の世

盤斎てふ名所の題にて

それて行秋といふも世の山風にちるみちかつちるまのさひさ

なくよろしくおほ申。それ義を讃ハ国家に仕なから義に

出せしば。後難を懼るなりや秀和ハ逸せし。其弟も其讃

他家に仕て江戸にありしを。秀和よりまてうとも兄義を讃

より不興のよしいひおくりしとて見もたいめせられし。

秀和書写つの文を書てぜひもなきおもひこてらとそれ。

かゆうの心にてハ此方のたりまきまてそれしとのも かは

はぬまてあるへく。法度もなく。てふの御わその渡世。

△邶風柏舟 詩經 我心匪鑒。不可以茹。亦有兄弟。不可以據。薄言往愬。逢彼之怒。

寺坂談 [illegible]

兄弟に告まてんなどしくくら。邶風柏舟の詩に兄弟

あれともよるべからず。ゆきてうつたへて愬とハ彼が

怒にあひしといへるもおもひよせられてあはれなりかりし

兄。秀和同息秀富自盡を納へる後。おもひかねてや

数日食を絶て身病かくて逝り。墓ハ平安本国寺の

塔頭了覚院にありて。梅心院妙薫日性信女。元禄十六癸

未六月十八日と刻す。鬼録にハ法名のうへに一字ありやそのまゝん

もれをいそかまし。何かはしれおもひ。更へきと緯其の名を

書。自滅と記す。終をばみをもて死せるにや。

同に記す。秀和の姉も同義士大高源吾が母なり。是も

幸教父子て妓名。小野なる十内と
妓名の氏。後と名乗の幸一の名。
名果も記く○惟淑按。隆興立
不知孰是。但以十内為従
弟者誤。其為婿也。既明于
録中矣。

續畸人傳　金丸の女と幸と云ふ。
幸女母と後ひ後婚の妻孔と快本
の寺社と修てこと。幸女伯父の俗
名其の寺と奉行と為て。尼と
なんと孔しけるを信けぬ八
歳を過ぬせこの所と卧。
おもるものはひもなくなく疾け
ましと。盛てあこれりとて。妙海と
名乗けるの業を為へこと。
惟淑按。此傳與本文相照

義なり。貴なりこと。主君ちの為も我こともの
こと。又秀和妻あへの母の中と一所と云ふ。
ひろ人の事なるへし。惟淑云。此二傳の次。小野寺大高
二氏の後下と加たんへきこと。
婚姻　金丸女　妙海物語○惟淑按と。續畸人傳と為網我
為たとハ。吾妻と取り祖母の傳とも併て与と載せる。

婚姻　金丸の女と順と云。父金丸。安と後武庸と嗣とし。
女と妻合せんとせこるに國雄我り。後婚の事一と及へり。
金丸の妻の順女と老こ後。はやく身はめりて。順女が祖母法名
正修院と云る人と育こまたり。祖母正修院の内証の襁褓
の中より財産ひきこと。
の中より財産ひきこと。

則當知其為誤也

四十七士傳附録　引鈴林
庖言曰。初幸歴信濃遇一
女子従人之江戸。見幸憫
之與以團飯。幸既至江戸。
聞女子為倡。乃就其廃。乞
金贖之嫁人。以報一飯之
恩。
又引侍坐記言曰。我文公
嘗召之郎中。問金丸等事。
語及其母。幸曰妾父之死
也。母不哭曰。捐軀殉國。士
之常也。何悲之有。諸士婦
若有悲泣者。我當以刀子
扶其眼耳。人始知其母亦
烈婦人也。○惟淑按。母恐
祖母之誤。

待りなり。後婚
せり事りしよ。祖母人とてはなし。主君の当ること養子
と後たれ。祖母や事と為こと。心迷いて事りる
らんえ。財面中
めくて。倫
血とそそぎてあ
安と事事りし
中たきと着こは
いりよるき。
通一後と閉て。祖母はかり財面一。

取あり。是い迄之勝と称するものゝ後より名乗るべきものゝ絶ひ
亡たり。建立の年代は詳ならず。後順次住職ありて後継と遂て。又廃
亡を繰り返し。後順次住職ありて如圓よりあんとして住父なる僧の
長崎支泰寺の在けるを招て剃髪を請ひけるに。其僧
吸女を伴んとして一宮と。二年の後僧香の外い以と
入立して浄法を授けたるよ。今く以て海一たるよ感して。
髪を剃り戒を授けて妙海と名つけたり。十四年九月十九日なり。
其方志のめく依國の霊場を通参せんとて。むものゝ終
お立たり。時に行年十一宿あるべき役りなきよ。剃札の下に
る引也。墨の染りて面となり。墨き衣とそて。男子の姿もやと

生一。よいよ心を決して。ひそかに志を述べて江戸を出立しよ。年廿九十
なり。ほひよ志を述べて。亦徳家の再興のん事と妙海よ托
迎きに迷書して。亦徳家の再興のん事と妙海よ托
したりとて。其郷ひを宿よ作一事二度よ及ぶり果よ。
岡老の留る一依林を入たる事もありり。此後落て郷ひ
なば。幸高よさくへとゝんのよ。そ郷ひの時を
を嘆き。せめての志よ江戸院をはし。義士の菩提
と吊んとて。泉岳寺の側よ形ばかりなる菴を結びて。
清浄菴と名付け。供養怠たる事なかりしぞ。故戻
ありの後戻り多くの布施を給り。多くき事なて。

[illegible]
業を幼くして[illegible]
より招きさらに[illegible]。歳八十八よく[illegible]。[illegible]の字を書けとの[illegible]
人よりひて[illegible]。[illegible]。幼より[illegible]
[illegible]よみ[illegible]
よ[illegible]のいう[illegible]
妻[illegible]。[illegible]
[illegible]。字の[illegible]
[illegible]
[illegible]

冶之風姿。載在繪画者。必戴編笠。佩長刀。蓋當世之時好也。滄洲所謂猛烈者。當非指容貌而言也矣。

曰。奴聞主將去此地。遠徙山斜。奴老矣。恐無復奉謁之日。冀得賜一物。永以珠藏。非所敢望。敢布腹心。君曰。社稷傾覆。進退維谷。汝所知也。吾不得復列士人矣。卜居僻地。永爲小民。畊芸終身而已。與汝別去。無復見期。聊留此以爲別。乃以十數金賜之。妾大父怫然曰。老奴來謁。欲得賜主手澤所存一品。朝夕奉之。以代拜尊容而已。雖老悖。豈爲貪賜金而來哉。遂抗言曰。國家亡滅。痛豈可言。賤若奴尚抱憤怨。而況世奉國恩。而肉食者乎。然而竟無一人有報讐志者歟。乃攬金投君側。因慟哭。君默然久之。曰。吾過矣。吾過

矣。乃攬筆寫此圖以與大父。大父奉之熟視。忽欣然頓首拜謝。蓋君少壯時。從其尊公在江都。有時微行。必妾大父一人從焉。是其狀也。妾父在日。爲妾語如此。妾也不幸父母已沒。且無兄弟。藏以至今。乃從夫言。割愛奉贈。妾善珍藏。猶妾自藏也。鸞也喜感交至。慇懃致謝。遂懷而還。謹請先生爲記此事。余乃序次其語。且言於士龍曰。奇哉八介。可謂有氣節者。以余觀乎此圖。非尋常遊行。其顏含猛烈意。蓋大石子。雖不顯告深志。而暗示其意。故其狀如是歟。八介亦覺其意。故欣然拜謝焉。不言而喻於同心。豈不亦美乎。

西京紙屋川。椿寺。有天野屋利兵衛。五輪塔。題曰法正院空譽土喬居士。享保十八年丑八月六日歿。行年七十三。惟凞按。其緣起所傳。與賴千秋之撰有異同。要之。益好事者僞造也。

嗚呼此圖也。雖幺麼哉。節士精神所注。義奴意氣所感。宛然存乎目前。覽之者誰不慨然。非尋常繪画比矣。子其珍襲之可也。滄洲山人赤松鴻記

天野屋利兵衛　賴千秋著。在于甘雨亭叢書。附藝州平賀晉民跋。安永年間。浪華鹽屋伊兵衛者。恨利兵衛義迹之沈淪。搜索其事迹。以囑平賀氏。平賀氏又請之千秋。因有是著云。今畧取其要。以載錄于此。

天野屋利兵衛。名直之。大坂人。爲鄉長。世往還赤穗。及後讐之歿。其及國難。直之即走赤穗。欲爲效萬一。及後讐之議定。良雄竊託直之。製造其所用之兵仗。先是。直之抵赤穗。適公庫風于什器。良雄請而觀之。已而失一茗盌。衆皆意直之。良雄驚召直之謂曰。今日失茗盌。我極知子弗竊。然子之外無入其室者。將如之何。直之恬然曰。僕實竊之。豈有所逃死。請速就刑。時有司潛告于侯。侯曰。寡人取而把玩耳。直之何知。於是群疑始釋。良雄見其甘引罪不愛死。至是直之躬自奔走於工肆。隨成而輸之江戶。有治工神力氏者。詣官曰。有請造一長兵者。以其制奇異告之。時都下鍛工匠人。傳聞之。其嘗爲直之作兵器者。皆告於官。於是遂下諸理。拷掠甚急。幾絕者數矣。直之請曰。此事有所由。自分死。但至明春。當自首。不然身且靡粉。不敢

白也。其容貌辭氣。不似有姦慝者。官以故不復問。既而踰年矣。世間盛傳縉去冬義士之復讐。直之詳其事。乃請自首。引至于庭。則曰。直之歷世辱赤穗侯之眷顧。當良雄等圖報復。屬直之制造兵器。向之所造。即其所用也。今聞復讐。直之事畢矣。當傳刑之秋也。常恐事之洩。又憫刑之及。故未始使妻孥有知覺也。仰願宥彼刑。使直之一人就鬧鑊。則雖死猶生之年。言畢泣下。官感其義心。減死放之。家資悉賜其子。襲爲鄉長。其子稱利右衛門。直之入京。寓郭北瑞光院。以院淺野家有舊也。改名姓。曰松永土齋。以壽終。

惟潔按。直之事迹。無所見焉。其見者。獨有此傳而已。青山氏。四十七士傳附錄。闕疑不載焉。然余曩者有聞於一友人。曰。某先世稱天滿屋曲全者。嘗遊京師。邂逅松永土齋於某家。宴間話偶及謠曲打鼓之戲。土齋素巧此技。曲全亦好爲之。於是坐客皆慫慂。要張一戲場。二老喜而領焉。既而宴罷。客將散。某主曰。他日之戲。今日請卜定焉。不然則事恐不遂。而已。於是土齋愀然謝曰。某爾來。手不執鼓已久矣。今有此期。我又將就其場。竊先爲打鼓之狀勢。以試焉。孌撻之餘。手腕果不應心。恨此技不可復爲也。他日但使某在于看場。幸甚。伏請諸君憐察焉。坐客聞之皆泣下。無言而止焉。是談有可據。徃々以問于人。而未得確迹。頃日。京人某氏。謂余曰。京師有天野彌三左衛門者。直之之同族也。可以問焉。余喜而因某氏。寄書於其家。併示千秋所著之傳以質之。遂獲詳其確迹矣。嗚呼。如是節義之迹。並遺憾。因直載錄其咎書于此云。

千秋先生の纪事の傳と。手家の傳と。大同小異あり。

今甚要を採摘して、以て校正を乞ふ。

京都天野彌三左衛門補孝行寫

利兵衛直之。栄事をなさゞる。常に佐藤の家に住まゝせり。

淺野侯い大石氏なるを以て。特更に志を注ける事切りなり。赤穂侯へ佐藤侯を招きたり。と聞。

直之乗邨へ登城の節。容色の治侯を拝したるを以て。甚く

其旨直之より。大石氏なるを以て。特更に志を注ける事切りなり。赤穂侯へ佐藤侯を招きたり。と聞。

さるくの離候のはしより。或侯何の心もなく。町人ども

そのいはさるの間の出役より立ぬ者なりとのこと。酒くりを時

赤穂侯のは後よ。町人も人よりも。此利を得なんど、多く

用ゐも立をき者なりとなりしを。直之聞かくゝ。魂よ

感激せり。其後元禄の変起りし時。急き赤穂へは

もり。大石氏より。偏に一いよく籠城の企もなく。

一方の固も破しくと。大石氏おもおいく。

直之の節義を感しおり。大石氏より。

甚千秋先生の紀する所なり。今是を略す。官庭甚之義を感歎しつゝ。死と

ゆるして。大坂之郷に指を帰り。家屋敷没収ありし

没収しのち。天野利兵衛直之の家名実ふ亡て亡ぶ。

利兵衛一家より。小二郎と称す。滅家の後。治華小橋屋

系の正統と成る。早世より。惜むべし。子家系所を住をる

とぞ。直之帰りて園部村に閑居とぞ。追考ここに人天井屋敷と指をる所也

ありしこと。今ハ薩矣の邸となる。薙髪して松永古帥と称す。享保十二年。丁未正月二十七日。壽を全ふする。享年六十有八。墓ハ東山の西大谷に在。

右ハ佐る五の利を勝事迹ハ同人名代。七名ともいふる者の抱佶なり。此書家にして往まり。事と長事のりしとそ。大石氏より佐りて。今ハ秘蔵する者。相州康国短刀。

小倉侯羽織。行花入。〇横川勘平書簡。文言別紙ニ在す

唯照栖云。此書横川氏の淳ニ載たる者ニハ異ること多し。是ハ利を乗小三郎の方を列書せり。又赤穂之家臣ニハ沼名ハ無けれバ。この書もその一巻の内なるへし。

天野家系。楠刑部大輔正俊ノ子二郎大夫正定。其子左衛門尉正業。天野ト綱ス。其数代ノ末孫。彌三左衛門景綱。池田武蔵守ニ依テ軍功アリ。然レトモ豊公ノ故ヲ以テ。禄ヲ辞レテ。民間ニ住ス。但シ池田侯ノ用所ト成ル。其三子アリ。長男左兵衛勝清。元和年間。父景綱ト共ニ京師衣ノ棚。九太町ニ住ス。二男八右衛門。大坂平野町ニ住ス。池田侯ノ蔵元ト成ル。其子即チ利兵衛直之也。元禄赤穂ノ変ニ滅家セリ。三男市兵衛。江戸ニ住ス。天野将曹ト綱ス。景綱ノ末孫。方今京師中立売。新町ニ住ス。予家即チ是ナリ。

惟照按。直之家名存亡。此傳不ト興千秋所ニ著同ト也。然千秋之著。在ニ安永ニ距ニ当年未ト遠。其家存則義迹亦応ニ未ト泯。然則豈有ニ伊兵衛之恨乎。官賜家資於其子者可ニ疑也。当ニ以ニ此傳ニ為ニ実據ニ矣。

重訂赤穂義人録補正　巻下　畢

音釋

一丁ウ 枕（ノム）　斟上声。以首據㕝物ㇾ猶言臨

二ウ 輸（イタス）城ー音書。委輸ㇾ凡以物送之。曰ー

十三オ 輸（ヘケ）　音書。ー贏之㕝

十二オ 媿（ケタク）　音繅。耦ㇾ

十四オ 刷（ソル）　差去声。次ㇾ雜ㇾ

十四オ 訃（カ）　音付。告喪ㇾ

十四オ 褆（ヒツ）衣　音日。女人近身衣

十四ウ 瞑（メイ）　音明。閉目ㇾ

二ウ 隸（レイ）　音例。屬著於人ㇾ

十ウ 闔族（カツソク）ー音合。閉ㇾ猶曰一族

十ウ 奄（エン）忽ー於豔切。精氣閃藏ㇾ

十ウ 岐（キ）嶷（ギョク）ー音奇。ー鄂力切。十六ウ小児有知識ㇾ

十八オ 歷（レキ）剌（レ）ー音力。過ㇾ之傳ㇾ

十八ウ 洩（セツ）時ー音接。ー音恣揷刀ㇾ

十八ウ 周遍ㇾ

廿一オ 詢（ハヂ）　音搆。与話同。恥辱ㇾ

廿二ウ 區（ク）々　音驅。小皃

廿四オ 孱（センジャク）弱ー音淺。懦ㇾ音若。劣ㇾ

廿四オ 堂（トウ）々　音唐。盛ㇾ明顕ㇾ

十九オ 忽（コツ）々　昏入声。無根本ㇾ

廿二オ 下（クダス）理　音李。治獄官。曰ー

廿二ウ 玄（ヨウヘ）麈　ー音邀。ー摯上声。細小之謂ㇾ

廿三オ 粉　音齎。醯醬所和細切為ー。又碎ㇾ

廿三オ 楚（ソ）撻（ダツ）ー粗上声。叢木。一名荊。ー音類。打撃ㇾ

廿三ウ 邂逅（カイカウ）　音械候。不期而會ㇾ

廿三ウ 慫慂（ショウヨウ）ー縱上声。ー音勇ー勸ㇾ

廿三ウ 兜鍪（テイムス）　音獲。釜屬。以ー烹入。言極刑

廿三ウ 加（カ）ウ 扤（ウゲツ）言ー康去声。扞ㇾ之。辨論而不屈曰ー

廿三ウ 參（サン）ー　音牙。集ㇾ。猶朝參ㇾ

廿四ウ 痤（ソウ）　於計切。埋ㇾ藏ㇾ

廿四ウ 間關（カンクワン）崎嶇（キク）　音岌嶵奇區。屈轉ㇾ

廿四ウ 物色（フツシヨク）　音勿稽。繪其形象求之。曰ー

廿五オ 鞗（テイ）鑣（ヒヤウ）　音朝。ー馬飾

廿五オ 鼎（テイ）盛ー　都挺切。方ㇾ之。又當ㇾ音剩。大之長ㇾ

廿五ウ 煢（ケイ）々　音瓊。獨ㇾ

廿五ウ 憧（ショウ）々　音皇。ー有求而不得之意

廿六オ 憑（ヒツ）閱（エツ）　音伐。數。明其等曰ー。積其功曰ー

廿六ウ 物色（フツシヨク）　音勿稽。繪其形象求之。曰ー

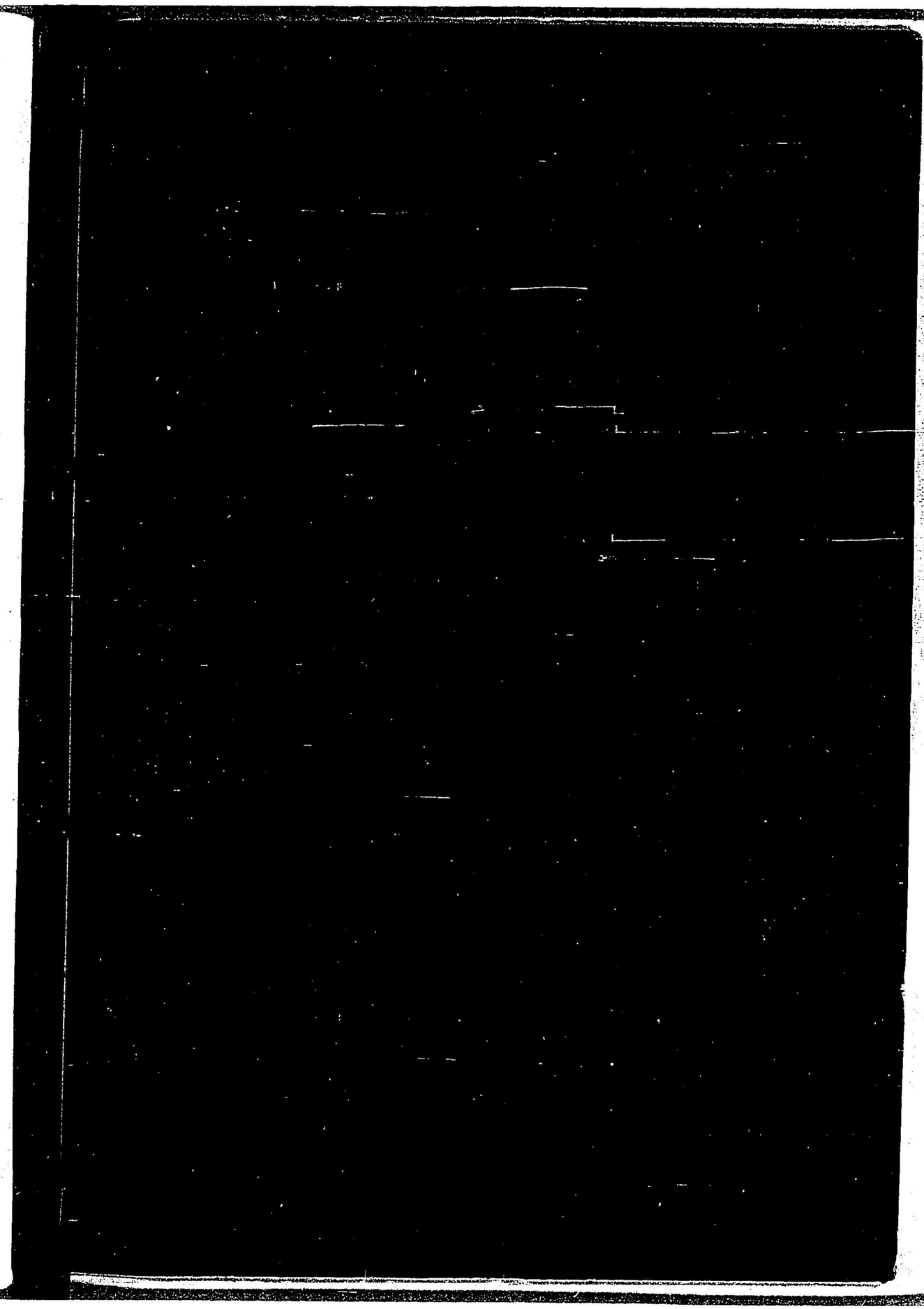
明治五年
九月發兌

赤穗義人錄補正

東京本石町　梳屋喜兵衛

西京三條堺町　出雲寺文次郎

大阪心齋橋南一丁目　敦賀屋九兵衛

尾張名古屋本町十二丁目　美濃屋文次郎

製本書肆　同　本町六丁目　靜觀堂伊六